婦人と子ども

第三卷第七號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	毎月一回五日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行
定價	一册金拾錢○六册前金五拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵税各一册一錢○切手代用は壹割增但壹錢切手に限る。
入會者	は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まるれば雜誌は無代價にて送呈すべし
購讀者	は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこと○見本は切手（壹錢に限る）下二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候に付き早速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ
編輯	に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと
廣告料	一頁拾圓。半頁五圓

明治三十六年七月二日印刷
同　年七月五日發行

不許複製

發行兼編輯者　東京市本郷區元町二丁目六十六番地　江崎政芳
印刷者　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京　東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第參卷第七號目次

子ども

馬と狐（やまとの翁）●伊蘇普物語（牧羊）●アンドロクルスと獅子（牧羊）●眞實の饗應（きみ子）

懸賞考物一題

家庭

家庭教育と婢僕の位置……ひさ子

母の感化……石井泰次郎

今昔いろは料理……

學術

奇妙な動植物……田寺寛二

史傳

大題小題（サーモピレーの戰）……米溪

文苑

船中螢……竹柏會仝人

古物語……うはう

說林

歐米にて觀察したる幼稚園……小泉又一

雜錄

幼兒の瀛車遊び……和歌子

江馬細香女史の詩……小林雨峯

幼稚園の遊嬉……附屬幼稚園

讀書餘錄（人情の勝利者）……東擊水

彙報

女子高等師範學校●女子教育講話會●東京府教育會女子夏期講習會●動物虐待防止會婦人部●音樂會●博覽會行學生乘車大割引●全國人口增加の割合●攝津通信

新刊紹介

會報

文部大學教授
日本女子大學講師
文學博士 小杉榲邨先生監修

美文類語 模範國語作文

本書は小杉博士の監修に成りたる近世並に現代諸名家の傑作中模範と成べき佳文麗句數萬を選輯し且國文學に志す者の便を謀り卷首に其讀むべき書目を順次に解題を施し猶作者の文章に就て批評し以て後輩に注意を與へられなど總て文作る人のために懇切を盡したるは他に比類を見ず苟も國文を學ばんと欲する者は勿論師範中學及高等女學校及同程度の學生諸君の作文資料として座右缺く可からざる最好の文鑑なり

附 美文類語
和裝美本紙數二百九十頁
古代文房具彩色圖挿入
正價 金五十錢
郵稅 金六錢

四書講義

- 尚武評論 孫吳講義 服部講義 一冊 郵稅 正價 四拾錢 八錢
- 深井氏講 大學中庸講義 合本 賣價 郵稅 正價 廿五錢 四錢 七十錢
- 花輪先生講述 論語講義 上下 郵稅 正價 七十錢 十錢
- 深井鑑一郎先生講述 孟子講義 二冊 郵稅 正價 七十五錢 十錢
- 學庸論孟 五冊帙入 郵稅 正價 一圓七十錢 二十錢
- 論文 日本外史講義 深井先生述 郵稅 正價 廿五錢 四錢
- 名取弘三 堀捨次郎兩先生述 正文章軌範講義 全二冊 賣價 郵稅 正價 五十錢 十錢
- 論文 日本政記講義 合本二冊 郵稅 正價 四十八錢 十錢
- 卦象明辯 周易講義 柳田幾作講述 郵稅 正價 七十錢 十錢
- 文法詳解 小學講義 羽山尚德著 賣價 郵稅 正價 六十錢 八錢
- 深井鑑一郎氏講述 孝經講義 內外篇 全二冊 郵稅 正價 二十五錢 三錢
- 深井鑑一郎 堀捨次郎兩先生標註 校訂標註 東萊博義 全三冊 郵稅 正價 九十錢 十五錢
- 新定標註 史記列傳 深井鑑一郎先生輔註 正價 各二十五錢 四十五錢
- 萬辭一鑑 文章形容詞範 金井至狂著 賣價 郵稅 正價 廿五錢 八十錢
- 戈洞堀先生編 作詩眼 和本一冊 郵稅 正價 三十錢 六錢
- 動詞形容詞活語集 郵稅 正價 二十錢 三錢

發行所 東京神田鍛冶町九四九 電話本局九 誠之堂書店

購客は誰れ各版出の著者の店と御指名に就て誠之堂書店へ

●世の父母たるものは必ず見よ!!●

兒童の歴史

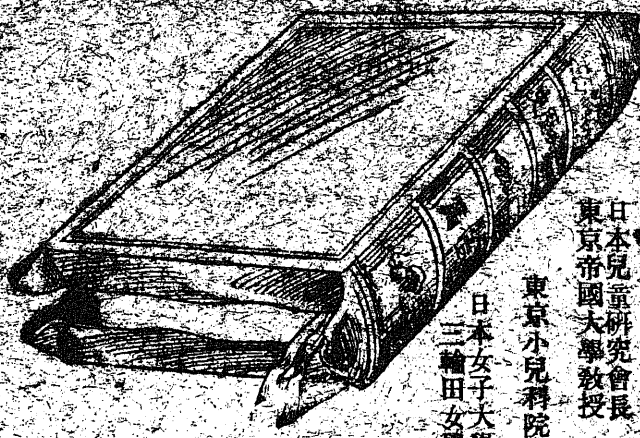
宮内大臣 子爵 田中光顯君題辭

日本兒童研究會長 東京帝國大學教授 文學博士 元良勇次郎君序文

東京小兒科院長 醫學博士 瀬川昌耆君序文

日本女子大學教授 三輪田女學校長 三輪田眞佐子刀自題辭序文

山本翠、煙編

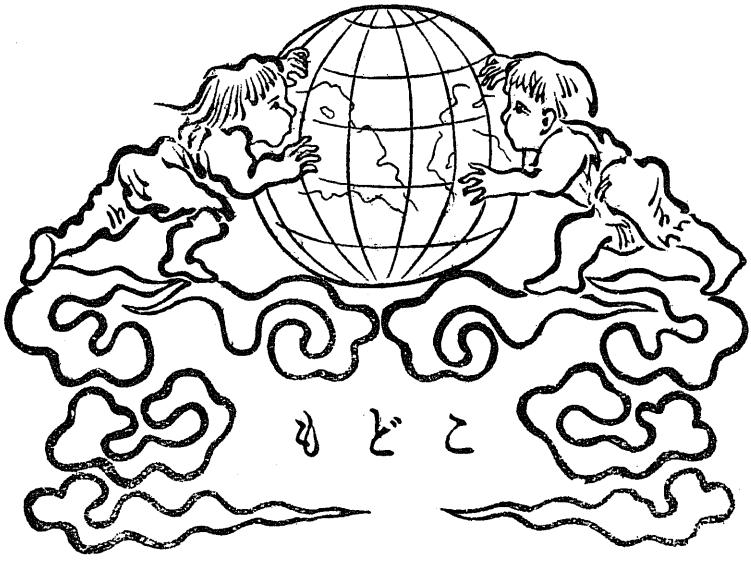


◎本書は父母をして兒童時代にたける日々の出來事並に養育方法、精身の發達及學事等を記錄しおかしめ以て他日の參考に供せしめんために刊行せるものにして日誌欄を設くるのほか尚皇室一覽、皇族一覽、天皇御歷代表、年代表、求月表、命名表、生誕日時表、生誕所名表、父母肖像挿入表、父母略歷表、系統一覽表、父母生亡日時表、父母婚姻日時表、親族表、親族生亡日時表、血族出生地並原籍一覽表、血族永眠墓國一覽表、血族墓所一覽表、親等表、祖父母性行表、父母性行表、小兒肖像挿入表、支出一覽表、等の必要なる事項は洩れなくこれを網羅し尚記入上最も必要なる事項に付ては東京小兒科院長醫學博士瀬川昌耆先生の特に指示せし賞にて完全無缺の良書なり

◎發賣所 東京市芝區西久保櫻川町二十番地 明翠書院發賣部

●尚本書定價表御希望の方は二錢郵券を添へ御申越次第送呈す

婦人と子ども
第參卷第七號



馬と狐

やまとの翁

むかし〳〵一人の農夫がありまして、一匹の馬を飼って居りました。さて、この馬は、永年忠義に働いて來たのですが、だん〳〵と年を取ってから、もー、今では力もなくなってしまって丸っきり、働くことが

できなくなりましたので、可愛相に、この主人は、何んにも物などやらないことにしました。それで、或日のこと、この馬に申しますには、

『お前の樣な、働けない者には、もー用がないから今日かぎり家を出ておいで、夫とも、家に居りたいのなら、今から山に行って大きな獅子を一匹引っ張っておいで、夫が出來る位の力があるなら、又家へ置いてやるから』

といって、痩せこけた馬を とーぐ厩から ひき出して、外へ追ひ出してやりました。

そこで、馬は、しかたがないから、すご〳〵と、門を出て、長い首を下向けにして、森の方へでかけて行きました。木の蔭の

所へでも行って寢やうと思ったのです。

所が　途で、一匹の狐に遭ひました。ふだんからお仲よしの友だちですから、いきなり、狐の方から　聲をかけて、

『やー、馬さんじゃないか、大層心配そーな顔付きをして、夫に、もー、夕方じゃないか、一體何處へ行くのです?、

と尋ねました。すると、馬は、

『おや、誰かと思ったら　狐さんかい、どーも困ったことが、もち上ったのよ

『へー、困ったことって?!　どーしたの?

『まー　こーなのさ、そら、君も知ってる通り、僕は、隨分永い間、忠義を盡して働いて來たのだろー。所が、もー、この通

り年を取って、益にたゝないといふので、今迄の事は忘れてしまって、主人は何んにも食べさせてくれないじゃないか、そして今晩っきり、とー〳〵厩から追ひ出されたのだが、君がたと違って、僕には寢る穴もなし、眞實に困るなー

『へー、夫で、もー全く望みなしなの？

『望みって!?、ないこともないのだが、とても、僕には出來ない相談なんだからなー。

『出來ない相談って、一體どーいふ相談です、事によったら、僕だって相談相手になれない事もないよ。

『獅子を引っ張って來たら　又家へ入れてやらうといふのだもの！、眞實に無理な相談だよ、僕等には、とても出來ないこっ

たからなー

狐は、この話を聞いて暫く首傾けて、考へて居ましたが、

『出來るよ　出來るよ　馬さん　僕は君を助けてあげる、そらこーするのです。君はこゝで死んだ風をしてじっと動かないで横に倒れて居なさい　今に計略をやるから

そこで、馬は狐の言ふ通りになって、死んだ風をして斃れて居ますと、狐はすぐ驅けて行って、獅子の洞穴の口へ行きまして、獅子に申しますには

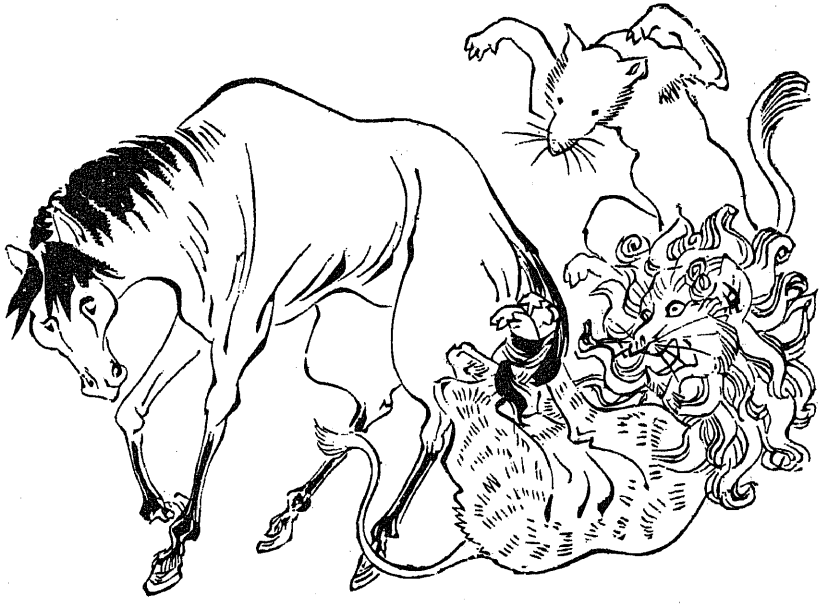
『この先きの所に、馬が一匹死んで居ます、今からすぐ私と一所においでなさい、大層な御馳走が出來ますから

すると、獅子はゆらり〳〵と洞穴の中から出て來て

『ウン　よく知らせて來た、夫ではお前、案内をしろ
そこで　狐と連れ立って　馬の所までやって來ますと　狐は
『シッ！、そら、ご覽なさい、此通りだ、私　これを都合のよ
い樣にしてあげましょー　それは、この馬の尾を、あなたの足
へむすび付けるのです、あなたは夫を引張って、洞穴へ持って
行って、お腹の空いた時分、何時でも　ゆっくりお食りなさい
　すると　獅子は大變喜んで、さすが、狐丈あって　中々甘い
事をいふと思って、『じや　くゝりつけて吳れ』といって、くる
りと　後ろ向きになって、靜にして　じっと待って居ります。
　狐は『へい〳〵　畏まりました』と言ひながら、これも、成る
たけ　そーっと　馬の尾を獅子の足へくゝり附けます。獅子は

狐が甘くやってくれることゝ思って、默って　こくり〳〵居眠りをしながら　立って居ると、狐は　時々　獅子の樣子を見ては　又後へ回って來て、とーとー獅子の足を四本とも、動かない樣に、馬の尾で　ぎっしりと縛って仕舞いました。

もー大丈夫と思って、狐は不意なり。『一二三』と合圖をしますと、今まで　死んでると思った



馬は　ひよいと立ち上った　獅子は　いゝ心持に居眠りをして居ったのですが　吃驚して目を覺まして　もゝ引張って宜いのかと思って　一足歩き出さうとした所が、四足とも一所に縛られて居るので　叶ひません、いきなり　地響して　打ち倒れたそこで始めて　狐の計略におちたのだと知ったもんだから、さゝ堪らない　大きな目を向き出して　恐ろしく　咆へ立てた。其聲の凄いことゝ言ったら、今まで　森として　樹の上などに眠って居た鳥どもは　皆吃驚仰天して、一度に飛び起きた位でした。

然し　いくら咆へても哮っても、もゝ四脚とも固く縛って居るから大丈夫、馬は　ゆっくりゝ地面の上を引きづって　と

ー〳〵家の門まで連れて來まして、こゝで　狐にお禮を言って狐は山へ歸るし　馬は家に這入りました。

恐ろしいうなり聲に驚いて　主人が寢間から　飛び出して見ると、前程出してやった馬が、大きな獅子を一匹引張って來たのでしたから、主人も　此馬が　年老ってまで　こんなに強くて忠義なのに感心をして　夫からは　何時までも可愛がって家に飼ってやることにいたしましたとさ。

めでたし〳〵

伊蘇普物語

牧羊譯

其二十四　農夫と蛇

ある冬の日に、一匹の蛇が、寒さの爲めに硬くなつて凍えて居ると、農夫が夫を見て、不憫に思うて、自分の胸の中に入れて温めてやつて居ました。蛇は人の温かさで、すぐ元氣付いて來ましたが、夫と同時に自分の惡い性質を出して、いきなり、恩人の胸に食ひ付いて、手烈い傷を負はせました。そこで農夫は絶え〳〵の息をついて、『私は、こんな惡漢に憐憫をかけたのだから、この罰を受けるのは當り前のことだ』

恩知らずには最大の恩惠も無益なり。

其二十五　人間と獅子と

或時人間と獅子とが、道連れになつて、森の中を旅行して行きましたが、途中で、互の自慢話が始まりました。一方が、『そりや力だつて、勇氣だつて人間の方が強いに定つて居る』といふと、一方は『なーに獅子の方が強い』といつて、お互に爭つて居ります中に、一つの石像の立つてる所へ來ました。其像は　一匹の獅子が一人の人間の足の下に蹈まへられて居る所なんです。そこで人は『どーだい、人間樣は違つたもんだろう、この通りだ、獸王なんて、とても叶はないさ』すると獅子は『だつて　この石像は、お前さんの仲間の人間が慥へたのだもの、若し僕等、獅子が石像を立てる仕方を知つてるなら、言ふまでもない、獅子の前脚で抑へ付けられた人間の樣を見ることが出來るさ』。

其二十六　柘榴と林檎と荊棘

柘榴と林檎とが、何方が一番美しいといつて爭つて居た。互に言ひ張つて、口論最中になつた時、隣りの生垣から、荊棘の花が、ひよいと顏を出して、さも自慢げな聲で言ふには『まー、貴嬢がた、少くとも妾の居る所では、そんな無益な口論はお已めなさいませな』

アンドロクルスと獅子

牧羊

近頃動物虐待防止會といふ會の出來て居ることは皆さん既に御存じでせう。この會は、人間が、自分よりも下な弱い動物を苛めるのは、いけないなるべく大事にしてやらなければならぬといふのでつまり動物を可愛がつてやることを、世間一般の人に奬勵るのであります。

動物だつて、つらい事も悲しい事も知つて居れば嬉しい事も樂しい事も知つて居ます。夫を無暗に苛めるのは、まことに彼等に取つて可愛相な仕業でありませんか、殊更、動物の中でも、恩に感じて其恩に報ゆることなどもよく知つて居るのが澤山あります。犬とか、馬とか、猫とか、牛とかの恩に感じたお話は、古からの本に澤山出て居ませう。して見ると動物だつて決して無闇に苛めてはなりません。

彼の獅子といふ獸は、皆さん御承知の通り、勇猛無類で、獸の王とまでいはれるのでありますが、其獅子に就いて、古くから傳はつてる面白いお話があります。

むかし〳〵亞弗利加の北の岸の所に、カルセージといふ國がありましたが、其國に　アンドロクル

スといふ一人の奴隷が居りました。毎日々々、主人にこき使はれて、ひどい目に許り遭ひますのでもーとても　辛抱しきれなくなつて、或日のことと一〳〵主人の家を逃げ出しました。

さて、だん〳〵、其市街を逃げて、走り出しましたが、或山道にかゝつた時は、日も暮れるし、腹も空くし　足も痛くなるし、もー一足も歩けませんから、其處いらの大きな洞穴の中へ這入つて、横になつた儘、ぐつすり寢こんで仕舞ひました。暫く經つと、入口の方で、何か知らん、大變な咆り聲がするので、吃驚して目を醒まして、走り出て見た所が、穴の入口の所に、大きな大きな一匹の獅子が　つッ立ッて居りました。

こーなつて見ると、もー逃げるにも逃げられないたゞ一口に嚙み殺されるより外はないと思つて居た所が、不思儀にも、其獅子は、音なしくアンドロクルスの方へ近づいて來る、別に恐ろしい顏附もしないで。そして、何だか哀れつぽい　低い聲を出して、しきりに何か助けて欲しい樣な風をする。だん〳〵側に近づいて來た所で、よく〳〵見ると、一本の足を跛ひいて居る、どうも怪我でもしたのでありませうか、少し腫れて居る樣な風だ

『ハヽー、これだな』！、と分つたので、早速獅子の側へ倚つて、丁度醫者が病人を診る樣な具合に、其足を取つて見た所が、跛もひく道理、其足の裏には、大きな太い棘がたつて居ました。そこで、すぐ其棘を引き拔いて、ハンケチを引きさいて、傷をしつかりいはへてやつた所が、痛みがすぐ直つたらしい。所が、此時の獅子の喜といつたら、大變なもので、丁度遊び盛りの小犬の樣に、

大きな尾を振つて、アントロクルスのぐるりを飛び回るやら、手を甜めるやら足を甜めるやら、出來る限りの厚意を顯はしました。さて其時から、アンドロクルスは、丸て獅子の大事なお客さんになりました。獅子は毎日出かけて行つては、獸などを取つて來て、夫をアンドロクルスに分けて食べさせます。

こんな風に、アンドロクルスは　彼れ是れ二月餘も獅子と一所に暮して居ましたが、或時、何の氣なしに、一人で山を散歩して居つた所を、とーどー追手に捕まつて　又元の主人の所へ引張つて行かれました。

所が、此時分の法律では、一旦逃げ出した奴隷が捕まつた時は、獅子に喰ひ殺させるといふ刑罰なのです。其爲に大きな觀せ物場が出來て居つて、大勢の人が集つて人間が獅子に食ひ殺されるのを見物に行くのです。

そこで、アンドロクルスも、だんぐ調べられた末矢張り、此刑罰を受けることになりました。もーどうしたつて仕方がないと諦めましたから、柔順く觀せ物場の眞中に引張り出されて、從容として、定まつた運命を待つて居ります。大勢の市民は、周圍の棧敷に座つて、この悲慘な演劇を見物して居ます。

暫くすると、片一方の隅から、恐ろしい咆り聲が聞こえた。見物人は一時に震へ上つた。見ると大きな獅子が猛り狂うて飛び出したのである。燃ゆる樣な眼は火の樣に輝いて、口は耳までも劈けて居る。いきなり眞中の餌食に飛びかゝらうとした。見物人一同は、先づ膽を冷やした。然し其次の瞬

間に於ける見物人の驚きは、又大したものだつた一思ひに飛びかゝつて食ひ殺すだらうと思つた其獅子が、打つて變つて音なしくなつて、丸で飼犬が主人に甘つたれる樣な調子で　アンドロクルスに纏さ付いて居る。

餘りの不思議に、これには何か所以があるだらうといふので、役人どもはよつて集つて、其譯を話させた。そこで、アンドロクルスは、何時か山の中で獅子を助けた話をして、其助けた獅子といふのは、はからずも茲に立つて居るこの獅子だつたといふことを演說しました。

大勢の見物人は此話を聞いて、非常に感動しました。そこで、アンドロクルスを放免してやることを役人に願ひました所が、役人も尤だと思つて、とう〳〵彼を宥して、おまけに、此忠實な獅子をも與へたといふ事であります。

眞實の饗應

き　み　子

ある人が、親類の家へ遊びかた〴〵尋ねて行きました。親類の人といふのは、いつでも御客に愛相のよい人でありますから、大變に喜んで、いろいろ御馳走をして饗應しました。そして、お別れの時になつてからも、一向御馳走も何もなくつて、御氣の毒であつたといふことを、くれ〳〵も言譯致しました。

すると、其人の申しますには、

『いえ、澤山御馳走になつて、御禮の申し樣もございません。然し、この次あなたが、私の家へ御いで下さつた時には、夫こそ今日あなたが、私を

もてなして下さつたよりも、もつとよくお饗應しやうと思ひます』

といつて歸りました。

夫から、暫くしてから、今度は、其親類の方から尋ねて行きました、勿論心の中では、先日あれ程に言つた事だから、多分大變な饗應になる事だらと思ひ込んで行つたのであります。所が、行つて見て驚いた。と申すのは、御馳走の用意などは一向見えない。そこで、これは案外だと思つて居ますと、主人は夫と察して

『先日御話致しましたでしよう、私はあなたがおもてなし下すつたのよりは、もそつとよくお饗應をしようといふ事を。あなたのお家では、いやもう大變な御馳走になりました。然し申さば始めての御交際でも願ふ他人でゝもあつたかの樣です、私はなんにも致しませぬ。何故かと申しますと、私はあなたを私の親愛なる家族の一人として見ますからです。眞實の饗應と申しますものは、そんなに格段の用意だの心配だのを致しませんでも、心から歡迎を致す事で、十分出來やうと存じます』と申しました。

懸賞考へ物一題

今年から高等科に入ることになつた妾の一人の妹に、或日養蠶を手傳はせて居ました時、妾は次の考物を出して、當てたら何でも好きなものを上げると申しました。一生懸命に考へて居る風ですが、まだ考へ當たりません。それで、本誌へ出して愛讀諸姉の孃ちやんや、坊つちやんにお答を求めます。

●答は姉さんや兄さんに書いて頂いても宜しい

●お答の中に郵券四錢を添へて送つて下さい。

●甘くお答の出來た方で、五、十といふ節番に當つた方には景品をさし上げます、御添附の四錢は景品送附料にする積りです。番號は到着順にします、特に五十番の御方へは、

室内電話　壹個

をさし上げます。

●御通知のなき御方は答が違つてるか、又は節番に當らなかつたのだと心得下さい。

考へ題

ある家に、二人の男の兒が出來ましたが、十歳位の時、不幸にもおつ母さんが逝くなりましたからお父っあんは、又二度目のおつ母さんを貰らひました所が、此おつ母さんには、連れ子が一人あり

まして丁度、前のおつ母さんの子供と同し年位ですから、非常に仲が惡くつて、お父っあんも、之には誠に困りました。

さて或日のこと、このお父っあんは、後からのおつ母さんの子を前にして、前のおつ母さんの子供二人は自分の後にして、都合三人を引き連れて、餘所へ出かけましたが、途中に一本の丸木で架けた橋があります、そこで、此橋を渡るに、どうしても子供を負うて越さねばなりませぬが、二人一度に負うて越す譯には行きませぬ。夫れかといつて、一人づゝ負うて渡りますと、前のおつ母さんの子一人と、後のおつ母さんの子とは、屹度一度は一所に置かねばなりませぬから、そうすると又々爭を生じまするので、お父っさんは暫く考へた後で、とう〳〵一人づゝ負うて越させて、併も、

一所に置かない樣に渡つたといふことです。どういふ方法で越したのでしようか、よくお考の上御申込みを願ひます。

申込所　三河國西加茂郡筋生村字黑笹　近藤とき子あて

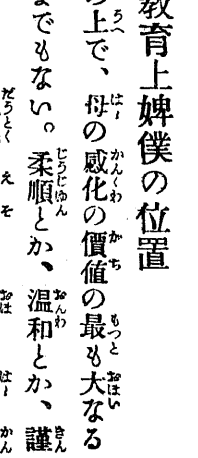
解答紙　隨意、但順序を簡單明瞭に記すべし

申込期限　八月五日限とす

披露　九月發行の『婦人と子ども』紙上

以上　近藤とき子白

家庭



家庭教育上婢僕の位置

家庭教育の上で、母の感化の價値の最も大なることは言ふまでもない。柔順とか、温和とか、謹慎などのいろ〳〵の道德の要素は、多くは母の感化の賜である。而して父の感化は之と幷んで、又大なる効果を與へる。所謂强固なる品性の成立とか不撓の勇氣とか、明確なる理性等は即父の勢力を待つて、始めて完成すべきものである。だからして眞誠に家庭教育の圓滿の効果を完成するには

父母の感化決して其一を缺くことが出來ない。男の子にしても、女の子にしても、理屈は同じことである。

然し、こゝで注意すべきことは、父母は家庭教育上最も必要な最も重大な感化を子供に與へるものには相違ないが、而も父母丈けが、家庭教育上唯一の要素ではない。語を詳にすると、家庭に於て教育的感化を與へる者は、獨り父母丈けでない一所に住居する所の家族も皆それ〳〵感化を與へる所の勢力たるものである。勿論其他の家族の感化の勢力は、到底父母ほどは、强力だとはいへない、然しながら、若し夫等の感化が、反對に惡い方へ導く所の勢力を與へるものであつたとすれば夫がために、父母の善良な感化は、頗る其勢力を殺減せられるのは明である。

此點から考へて大に注意せなければならないのは、各自の家の婢僕である。もとより乳母となつて見ると、雇ひ入れる方でも、其身體上より、精神上よりから、いろ〳〵注意して調べた上で、雇ふといふことは言はないでも、分り切つた事であるが、夫でなくつて、たゝの御飯たきとか、仲働きとかいふものになると、格別直接に子供の教育上に關係するのでないから、雇ひ入れる方でも餘り選擇に注意などしない傾である。然しながら、直接に子供の教育に關係しないからといつても、先づ普通の家庭に於ては、朝夕、子供等が、彼等と交はるといふことは、どうしても避けることが出來ない、交はることが避けられないとすると、よかれあしかれ、彼等の感化を少しでも受けない譯には行かないのである。

そこで、今日の場合に於て、下婢の狀態といふものは、最も多數は無學無智で、丸で無教育の者だといつてよい、地方では殊に、左樣だが、東京でも矢張同樣である、其口にする所の談話といひ其歌ふ所の俗謠といひ、何れも野卑極まるのである、而して、子供等が彼等に接する毎に見まね、聞きまねで化せられるとすれば、其教育上に取つて、どれ程の惡影響を受けるかは言はずして明である。

殊に時々經驗する事だが、幼稚園などへ附き添うて來る下婢等が幼稚園の控室で、勝手に野卑な俗謠などを歌つて居る、或は、子供を載せて來た車夫などが、同じことをやつて居る、夫を聞き覺えてか子供等が、又歸るさに同樣な俗謠を歌つて居る、幼稚園では、格別此の樣な俗謠は注意して禁じる、父母もまさか教へることはあるまい、而して彼等は無邪氣な幼心に、之を吹き入れるのである。

か樣なことは、只だ彼等が無教育であるからといつて棄て置く譯には行かない、苟くも家庭教育の上に心を傾くる人は、是非とも又、此事に注意をして、此惡感化を避ける樣に心を盡さねばならぬ。即ち、其が爲にはどうしても、家庭に於て彼等を教育してやる、面倒を見ねばならぬ。出來る丈け彼等を教育して、彼等に智識を與へ、彼等の思想を高尚にし、純潔にしてやることは、即ち此惡感化を避け得る所以であつて、夫と同時に又、憐むべき彼等に對する義務であらうと思ふ。

母の感化

ひさ子

『母の思は空にみちゆくへも知らずはてもなし』とか、實に母が子を思ふ至情は一分一秒もたえまなくかはりなく限りなく、子に注がれて居ります「子を思ふほど親を思はぬ」とは申しますけれども、特別に悪い人を除いては、子が母を思ふ至情も是亦筆や口につくされぬほどのもので、つまり母子の愛情は、とても言つたり書いたりして表はす事のできぬほど、深く厚く限りなきものでございます。之は昔も今も何地でも何人でも、かはりのない知れきつた事でございますが、私は今日ひとつ此相互の愛情の泉から流れ出づる感化、殊に母が子に及ぼす感化といふ事に付て少し書きたいのでございます。

母の温かい心から流れ出て子に注がるゝ愛情、實に限りも知られぬ愛情、其ものは母が子に對して何をして居らずとも、子に向て何を言て居らずとも無論子に通じて居るので、從て子は絶えず實に一分一秒のたえまもなく、母の感化を受けて居ります。是れ相互の愛と感化といふ事はどうしても離れられぬものであるからなので、そうして母の感化は即ち子の品性となつて現はれます。古から賢母と仰がれて居る孟母、正行の母などは、勿論良い例でございますが、現在今日生存して居る人達否人毎に「此母にして此子あり」といふ事が善い側からも悪い側からも現はれて居るので、又遠い昔や遠い處や他人を考ふるまでもなく、第一着に自分の事を考へて見ても、母の感化といふかな例が示されて居りますので、ましてまはりの

人々を見れば見るほど、たれも〳〵此例證であるといふ事は、誰方も御感じになる事であらうと存じます。誠に生きと生ける人間一人として母の感化を受けぬものはございますまい。萬一母に肖ぬ子がありましたならば、それが特別なので母が無限の感化を子に與ふるといふ事は自然でございます。

母の愛情感化は時々刻々子に及びますから、知らず〳〵其温情はチャンと子に印し其感化は深く染みこんで、たとひ母の身体は死しても其心は子の心の中に生きて居つて、子の心、言、行を支配します。あゝ母の責任、之を重しと申しませうか。大なりと申しませうか。私は申す詞を知りません。

殊に、こういふ時に母はこう言はれたとか、あの時にはあゝなすつたとか、あゝして下すつたとかいふ事が、特別に記憶に殘つて、それがどうしても忘れられぬといふやうな事は、何人にも多いか少いかある事と思ひます。之は母の子に對する一言一句一擧一動には皆愛あり生命がありますから、深き感動と消えぬ印象を與ふるのでございませう。そうしてそれらは母の感化の強い事に對して容易に説明を與ふる一の材料でございませう。

私は先日、婦女新聞社の女子教育講話會で、巖本善治先生の演説を承りましたが、其時に先生の御話しになりました母の感化に付ての例は、並み居る人々に深き感動を與へられました。それは大略次のやうな御話でございます。

私の友人の一人に誠に男子らしい男子であると友人間で評されて居る人がある。其人は非常に

強く母の感化を受けて居るので、「どうしても忘れられぬ事がある」と言つて話す事柄がある。

其人は舊幕時代或小さい藩の貧乏な士の家に生れたので、其母は毎日々々一生懸命に機を織つて其織り賃で、僅に、其子の父即ち我夫の好物を調へ、毎夕それを其食膳に上せて、其舌鼓打つて喜ばるゝをば自分の非常の樂喜として居られたといふやうな生計の有樣であつた、處が或日當時まだ八九才であつた私の友人が、外で散散遊んで腹をへらして駈けこんで歸り、「阿母サン御飯ヲ食べタイ」と訴へた。をりしも阿母さんは一生懸命に只機を織つて居られて、之に對して何の返辭もせられぬ。あとで分つたが、其時は米が皆無になつて居つたので、之を織り上げて賃を得てから米を買つて來て御飯を炊くといふ心算であつたので、がしかし自分には何も分らぬから、又もや「阿母サン御飯を食べタイ」と叫んだ。阿母さんはやはり一言も言はれぬ。セッセと機を織つて居らるゝ、自分は何かなしにやかましく「早ク食べタイ」といふ事を訴へてやまぬ。阿母さんは堪らなくなつたと見えてとう〳〵機から下りて、自分を紐で脊に負ひ又機を織りはじめた。此間全く無言なので自分は脊の上で何だか淋しくてショゲて居ると阿母さんはポロ〳〵と涙をこぼして居らるゝ。そうして糸の上に露をなじた涙を拂ては又セッセ〳〵と織つて居らるゝ、さてとう〳〵獨語を言はれた。「アゝ一度ヤ二度御飯ヲ食ベナクトモヨイト言フヤウナ男ノ子ガホシイ」と、之を聽いた自分は實にたまらなくなつて「アゝホント

ウニ一度ヤ二度御飯ヲ食ベナクトモヨイ」と思つてしまつた。此時の心持は今に忘れられぬ。もう一はこうである。自家の近所に極性質の悪い一人の青年があつて、阿母さんは何時でも、「決シテ此兒ト遊ブナ」と戒めて居られた。處が或日のこと、其青年が「チョット」と自分を誘ひに來た。何心なく行くと「一緒ニ來テ呉レ」と言ふ。ついて行くと神社の鳥居の前まで來て「此處ニ待ツテ居ッテ呉レ人ガ來タラ知ラセルノダゾ」と頼んで獨りではいつてしまつた　少時ボンヤリ待つて居ると、やがて錢を持つて出て來た。(之は竹のさきに鏑をつけて賽錢箱の中のを盜み出して來たので)そうして番をして居つた事の禮を言つて、「之カラ此御金デ御禮ヲスルカラ」と言つてつれて行く、さて町に行くと大きな羊羹を二本買つて、「サー之ヲ食ヒタマヘ」と一本を呉れた。たまに一切か二切他家で貰て食べる時に、「ドーモオイシイモノデアル一ぺドッサリ食ベテ見タイ」と望んで居つた羊羹を目前に出されたのであるからたまらない。喜で早速食べようとした一刹那思ひ出した。それはかねて阿母さんから此青年と遊ぶなと言はれて居つた其戒が不圖心に浮んだので、サーそうなると其悪い兒から貰つたものを、阿母さんにだまつて食べるのは何だか悪いやうな氣がして一目散に駈け出して歸つた。いつもより歸りが遲いので心配して居つた阿母さんは喜んで迎へて「マー何處ニ行ッテ居ッタ」と言ひ〳〵自分の手に持つ羊羹を見る。「コー〳〵デ食ベズニ持ッテ歸ッタ」と話した處が、サー其時の母の

喜と言つたら形容のしかたもない位で、實に椽側で雀躍をして喜ばれるので「マーヨク食ベズニ歸ツタソレヲ一口デモ食ベタラバモー武士ニハナレナイ處　アッタ」とそれは〳〵非常に喜ばれる。羊羹を持つたまゝ庭に立つて居た自分は呆氣にとられる。さて阿母さんはすぐ自分を連れて裏の方にある川の傍に行き、自分の手にして居つた羊羹を取るより早く、ポーンと何處まで行くか雲の中にでもはいつたかと思ふほど力かぎり遠くに投げ出してしまつた。手の内の玉をとられたやうな自分はワッと泣き出した。母は「之ヲ食ベナカッタノハ誠ニヨイ其代リニ今日ハ汝ノ好キナ物ヲドッサリ上ゲル」と言つて歸つてから麥ころがしを澤山食べさせて呉れた。

之が忘れられぬ一の事柄なので、其後世の荒波の中に立つて誘惑に勝ち艱難に堪へた時毎に、母が雀躍して喜んで呉れるやうな氣がして。其樣が目にちらつく。

わゝ此阿母樣の心は今もなほ此方の心の中に働いて居らるゝのでございます。女子教育が今ほどに盛でなかつた舊幕時代に、之ほどの美はしい精神的感化を其子に及ぼした例は少くないと思ひますが、明治の阿母樣は之に省みて、其子の精神教育といふ點に於て果して遜色なしと申されませうか。

アゝ母の感化！　れそるべく尊ぶべきは母の感化!!

今昔いろは料理

石井泰次郎

（あ）

あへ物の拵方

白拌の拵方は、豆腐を布に包みてしぼりたるを擂盆にてするに、白味噌をまぜてすり、馬尾篩にてうらごしゝて、野菜のにんじんにてもあへるなり砂糖しほなど入れて味をつくべし、中に入るゝ物は下煮を醤油砂糖にてしておくなり

黒拌の拵方は、昆布を焼きて粉となしたるを味噌にすりまぜて裏漉してあへるなり、中の物下煮は白あへに同じ

青拌の拵方は、青菜にても菠薐草にても、湯煮して湯をしぼりたるを、白味噌にすりまぜて裏漉してつかふべし、物の下煮前に同じ

黄拌の拵方、黄は雞卵のよろしきを湯煮してかためたるを、黄味のみを分ちて、白味噌にすりまぜ裏ごしゝて拌るなり

赤拌の拵方は、梅干の身をとり、砂糖と白味噌とを合せてすりまぜ裏漉してあへるなり

胡挑拌の拵方は、くるみのむきたるを湯に漬て細串にて皮を去りて、庖丁刀にてきざみて擂盆にてすりて用ふべし、味噌にあはしても、豆腐に合してもつかふべし、くるみ斗にてもよし

胡麻拌の拵方は、胡麻を焙燥にていりて、擂盆にてすりて、能くねばり出るまですりて、豆腐か、味噌かに合せてつかふべし、白も黒も同じ

肝拌の拵方は、たらの肝、鳥のきも、蛇の腸などにてあへる、これも肝を煮て味噌にまぜてす

りて裏漉して用ふべし

小豆餅玉子拵方

小さき鳥の卵を煮ぬきて、湯出玉子となし、殼を去りて、卵のまゝ、小豆餡のなかに入れて包みて扨其上に、小豆の煮たる物をつぶ〳〵とつけて出せば、かのこ餅の如し

泡雪吸物の拵方

かつをぶし煎汁《精進ならば板昆布又は椎茸の煎汁を用ふべし》にて清汁に仕立《かつを十匁水四合醤油一勺二夕味淋一勺八夕鹽一匁ほどにて》ふき、其まへかたに鷄卵の白味二つを鉢に取て、箸三四本か茶筌にてかきまはして、泡だつべし、全く白味の泡となる時、一杓子づゝ、右の清汁の鍋の煮かへりたる中へ入て、直ちに椀に盛て出すべし、一椀に一杓子づゝ何椀も同仕立方なり、副物には淺草海苔をやきて色紙形にきりてか、又は細かにきざみて入るべし

淺草の苔海燒方

海苔を燒くには、兩面よりすべからず、必ず一方よりやくべし、さて一枚を板の上におきて、醤油をさつとかけて、其上に又一枚をのせ、又醤油をかけて、又其上に一枚のせ、かく四五枚にして重ねたるまゝ兩面よりやくべし、むらなく燒くべし

（〈さ）

櫻瓜の拵方

瓜を細かに角形に切て、鹽にて揉て、青豆のぬたに、からし、花かつをゝすりこみて、隱味噌を入て、酢にてのばし、馬尾篩にてこして、皿に敷て、右のもみ瓜をおきて出すべし

櫻花の吸物

此採合は飯に防風にして、即花にあらしあるを、防風東風とさかせたるなり、

砂糖蜜の拵方

白砂糖二百匁、水二合、玉子白味半分、まづ玉子の白味ばかりを分て半分だけを、二百匁の砂糖の鍋のなかに入て、水一合を合せて杓子にて掻まぜて炭火にてとくべし、さてふき上る時に、水五勺ほどを入る、次にふきたる時鍋をおろしおくべし、扨五分間ほど置きて、わくの固りたる時、杓子にてすくひ去り、又鍋を火にかけてふく時水を入れて、又ふく時おろし置くべし、扨絹篩にて漉すべし、甘露水、又は煮物、菓子の銀玉糖などの原料につかふ物なり

奇妙な動植物

在高師　田寺寛二

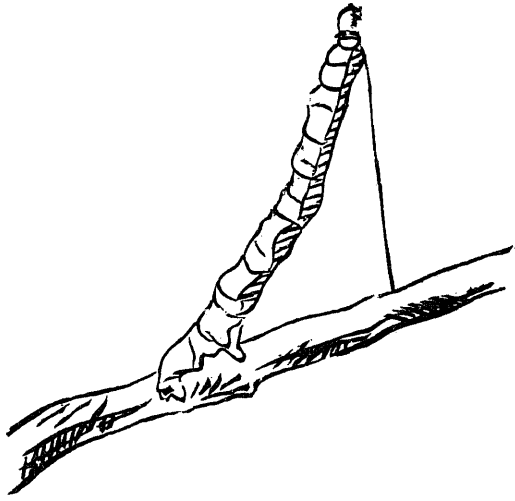
一寸考へて見ますと、植物などは唯ずべ〳〵と大きうなつて何の心持もない樣ですが、深く調べて見ますとなか〳〵面白い仕組になつてゐるものがあります、殊に動物などは一層巧妙に出來てゐまして、調べて見れば調べて見る程面白くてなか〳〵やめられませぬ。それで私はこれから暫くこの欄の餘白を借りまして續々奇妙な面白い動植物の事について話申し上げませう。

先ず初めは動物の方ばかり申しまして、それか

ら後に植物の方にうつることゝしませう。

(一) ベントウコワシ

此虫はシャクトリムシのことです、此虫は細長い箸の折の樣な虫で、歩む時には尻を頭の處まで持つて行きまして、此部分の足でしつかりと物を握り、それから頭を延ばし頭の處の足で前方の物体をつかみ、また尻の處を頭に近寄らせて物を握り頭を前に進めるといふ風で丁度御婦人方がモノサシで反物をお計りになるのと能く似てゐます、それでシャクトリムシといふ名がついたのです。このシャクトリムシは甚だ奇妙な性質を持つてゐます、それはどうかといひますと此虫が休むとか眠むつてゐます時はいつでも口から一筋の糸を出しまして、圖にかいてある樣な位置にとまつてゐます。そしてその体軀の色合はどうかと申しますと、その虫がとまつてゐる木によつていろ〳〵違つてゐます青い木であれば青い色をしてゐますし、枯れた木であれば其枯木の色と同じ樣な色



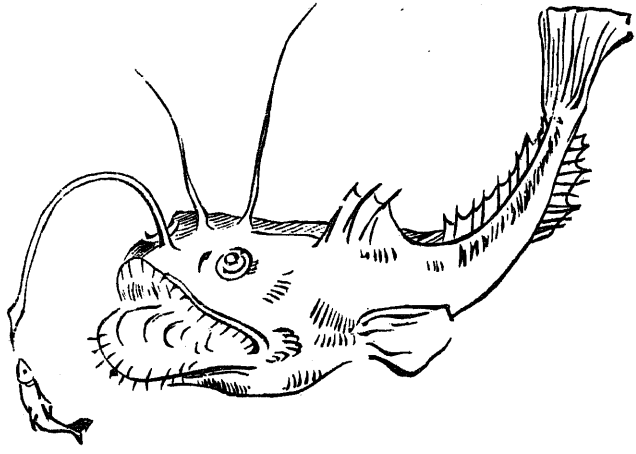
をしてゐます。それで一寸みると木の枝の折れ殘りの樣に見ます、これが面白い處でありまして

此樣に木の枝の折れ殘りの樣にみゑるのは、此虫が生活をうまくやつて行く上に於てなか〳〵深い理由がある所であります。なぜかといひますと若しこの虫がこの木と違つた色をして唯ぼんやりと止まつてゐましたら、外の強い虫が來まして直ぐ食つてしまいます。しかしこの虫が木の枝に似せてゐますから、外の強い虫が見てもこれは木の枝だとおもうて寄りつきもしません。

それで度々面白い事柄が起ります、桑摘をしておられる御婦人方が朝早くから桑畑へいつて、急いで辨當を木の枝へかけようとしられると、枝はころりと折れて辨當が毀れてしまふ事が度々あるそうです、これからしてこの虫の名をベントウコワシといふのです。

（二）魚を釣りて食ふ魚

アンコウといふ魚は大きな口を持つてゐる極不恰好な魚でありまして頭の上には細長い鬚がはへてゐます此鬚の先には一寸小さな肉の切れの樣なものが附いてゐます



この魚は常に砂の中にむぐり込んで躰をかくしてゐまして唯頭だけを砂の上へ出し靜かにこの鬚を動かしてゐます。そうしますとこの鬚の先端についてゐます肉の切の樣なものは靜々動きまして丁度小さな虫の樣に見ます

これを他の小さな魚がみますとよい食物があるとおもつてそつと此肉切を食いに參ります、するとアンコウは段々この肉切を自分の口の近くへ持つて參りまして魚を口元へ誘ひ來り不意に此魚を捕つて食います。

（未完）

史傳

大題小題　二

サーモピレーの戰（承前）

米溪

レヲニダス、サーモピレーに至るや、フヲニシヤ人、オータ山の栗林を通ずる山徑に付て告ぐる所あり。且つ其の山上の高臺、森深くして地凹める故、之を發見するは、決して容易の事にあらず到底、敵軍の見出し能はざる所なることを保證し其の地點を守らんことを請ひしかば、レヲニダス之を許しぬ。斯くて營を溫泉水清き流を繞りて張り、破壞せる往古の城壁を修覆し、專ら會戰

の準備をなせり。

ペルシャの軍二百萬、野に充ち、山に互り、踏み轟かす馬蹄の響、地を動かし、煽り起す砂煙、天日を蔽ひ、旗手の靡き、銅鑼の音、國内を震はして、渾土を搖りぬ。南方希臘人の心は沈み初めぬ。謂へらく　ペロポンネサスに於ける彼等の家は、比較的に無難なれは、寧ろ退て、コリンス地峽を防守するは、自衛の策に於て、却て得たるものにあらさるかと。然れとも、レヲニダスは、假令スパルタは地峽の下に安全なりとはいへ、之を以て、北方同盟の諸國を棄つるは、其の忍ぶ能はさる所なれは、其の守備に對しては、援助の兵を送り、唯ペロポンネサス人を止めて、其の任に當らしめぬ。

波斯の軍、次第に進み、龍攘虎鬪期迫りぬ。而して波の騎兵斥候は、一の報告を齎らしたり、曰く、前方、墻壁の内は、到底、知る能はざるも、其の前面掩蔽に於て、スパルタ人は、或は活潑に嬉戯し、或は互に其の長髪を梳れりと。

大軍境を壓して、存亡の機眼前に在り。而も悠々尚是の如きものあり。誰れか疑訝を其の間に挾まざらんや。サーキジス、此に於て、スパルタの太子なりしか、逐はれて國に叛き、却て敵の輔佐として勤むるものゝを召し、問て曰く、今や、我れ、大軍を率ひて此の境に臨む、而して彼等、尚兒戯をなして奔竄を忘る、氣顛せしにあらずんば、神喪したるなからんやと。

デマラタス之を否定して曰く、之れ死憤の勇を以て戰はんとするのみ。死を冒し、難に臨む、彼

等、必ず先づ、其の頭髪を理せずんはあらず、之スパルタ人の風習のみと。

サーキジス未た信ぜず、謂へらく、眇たる孤軍、何ぞ克く我が兵勢を支ふるの企をなし得んやと。此に於て、海軍の到着を俟ち、水陸一時に並び攻んとし、待つこと四日、未だ來らざりしかば陸上の運動は遂に初まれり。

強壯にして、堅牢に身を固めたる希臘人、豈短槍と、編たる楯に匿くるゝ波斯人の敵ならんや。飛び交ふ矢は、蝗の如く、撃ち合ふ劒は、電光石火、鋒鋩既に交はりて、波斯兵屢退く、傳聞す當時サーキジス、雪崩を撃て逐ひ退けらるゝ、自己の軍を見、失望の極、楊に安んずる能はず、起て跳躍扼腕するもの三度、突撃効を奏せず、喊聲徒に震ふも、希臘の陣地は、牢として拔くべからず。空しく天際を睥睨じて、旦暮を送ること二日。難い哉、勃々たる野心を逞うせんとして、無智の民を驅り、軍務に使役し、勇敢、恐るゝを知らず、義膽白虹を生ぜんとする健兒に對して、壓迫、巨岩の鷄卵に於けるが如くならんとすることや。

天乎命乎、デルファイの讖言兆をなし、スパルタ同盟軍を繞る悲風は、吹き初めぬ。……

夕陽既に舂きて、蒼然なる暮色、天地を包み、濤聲遙に互りて、山岳答へ、幾十里を壓する陣營、黑く丘陵と化せんとして、篝火劍戟に映し初むる頃、哨兵に誰何せられて、波斯軍に誘致せられしものあり。

國亡びんとして、老幼内に轉輸に勞し、大軍境を壓して、壯丁役に苦むも、兄は弟を警めて、國

に許し、妻は夫を勵まして、國に棒ぐ。子豈獨り父に恐ばんや、弟將た兄を思はざるにあらずと雖とも、一朝國家滅びんか、明日は之亡國の氓たらんとす、殘虐訴ふるに所なく、四隣散亡し盡さずんばあらず。天に哭するも、此に至りては益なきなり、地に蹉跎するも、此に至りては何の補かある。恐ぶべからざる所之のみ。敵愾の心凝る所以のもの之のみ。一人のスパルタ人にしても、血温かなる間は、決して敵の前に頭を屈せざらんとす。咄何者の賣國奴ぞ、敢て國を忘れて、獨り私利を計り、不義の富に醉ふて、大逆の臺に、榮耀の夢を貪らんとす。咄々、何者の逆賊ぞ、エフアイアルッ、愚と云はんか、蒙と名けんか、否々彼は遂に、天地容れざる大姦たり、國家の難を幸として、國を賣りしものなり。天も許さゞるべし、地も容れざるべし、人豈克く其の終を全うせしめんや。其の粟を食て、其の國を忘れ、其の土を踏て、其の恩を顧みず、山川長へに恨を吹て、今に至る迄、風雨其の姦を鳴さずんばあらざるなり。

武士の
矢なみつくらふ小手の上に
あられたばしる
那須のしの原

寅朝

船中螢

船やかたこき行く方に三つ二つ　増山三雪子
闇をうれしととぶ螢かな　水野忠敬

たへがたき暑さをよそに隅田川　船まちかくもとぶ螢かな　諏訪忠元

月夜よし夜よしと舟をこぎ行けば　風に螢のみたれてぞくる　印東昌綱

いざ舟子船さしとめよ川くまの　岸のあしまの螢かりせん

玉川を船こき行けば桃その丶　青葉のかげに螢とぶなり　亀野源量

夜船こぐ音も涼しき川波に　うち亂れても飛ぶ螢かな　大橋文之

少女子の團扇の風に招かれて　舟のほとりを飛ぶ螢かな　大竹伊勢子

みそぎして歸る夕べの川船に　かげも涼しく飛ぶ螢かな　相澤求

加茂川の清き流を舟やれば　玉とみだれて螢とぶなり　柴生田たつ子

船のぼる淀の小川の夕風に　さにぬ光は螢なりけり　頭本春子

古物語

うはう生

三つの問

むかし英吉利にジョンと呼ばれし王樣おはしき、いと惡しき君にて民のなげき人の惱は露思ひやることなく、ひたすら我儘なる振舞のみぞ遊ばしける、

都よりほど遠からぬカンタベリーの町に、アベーといふ大寺ありて住持は富裕なる老人にて、日毎の宴會に百人ほどの貴顯を招待し、五十人の勇士の美しくよろひたるを侍はしてすみなす僧正ありと聞きしジョン王、大に立腹せられ、如何にもして止めさせばやと思込ませらる、

ある日僧正を召して云ひけるは、

「朕きく汝はわれにもまさりて一層美しき宮殿にすみ居らるゝとか、我國土廣しと雖、われにまさりたる生活をなすべきもの一人もあるべきにあらざるに、また何人も願はざるべきなるに」と

「恐れながら我君」と僧正いと恭しく

「愚僧めは、愚僧の所有にかゝるものゝ外は費し申さず、何卒愚僧が友人や臣下を樂ましむるために宴會を催はすことなどを惡くおとりなき樣願ひ奉る」

王おごそかに

「惡くとるなとか　これが惡くとられいでか、この國にあるもの、普天の下卒土の濱、余がものならざるはなし、然るに何ぞや、汝は朕よりも華美をつくしてくらすを朕をはづかしむるものならずや、人或は思はん、汝朕に代つて國王たらんとすと」

「まー、さやうにおふせあるな、愚僧は〳〵」

「何んと申譯あるまい、汝の罪はいと明かなり、然らば汝若し朕が問ふ三の問に答へざらんか、汝の白髮頭引ぬいてくれん、而して汝の實はみな余のものとなすべきぞ」

「しからば御答申すべきか」

「然り、朕が金冠を頂きてかくある間は汝は一日中に我問に答へざるべからず、第一に朕はいつまで活きて居るべきぞ、第二に朕は全世界を一週するに幾日を要すべきかを答へよ、次に汝は答へよ今朕が何を思ひつゝあるかを」

「オー我君」それはいかなこと、とても愚僧には只今と申して御答は仕られず、しかし愚僧に二週間の猶豫をたまはらば、身にかけて御答仕るべうつとむべし」

「よし二週間猶豫とらせん、さあれその時、汝答ふる事能はざるに於ては、汝の首はなきものぞ」

僧正は恐ろしさに心も身に添はず、しほ〳〵として退出し、まづ　オクスホルドに馬を進めぬ、若しや彼處の大學にも行かば、物識りの博士を訪ふて、よき知惠もや得られんかとの望も、來て見れば情なや、空頼、博士等は頭うちふりて曰く、

「吾等は本をこそ學びぬれ、國王ジョンにつきて書かれたるもの無きを如何にせん」

止むを得ず、進まぬ駒に鞭加へつゝ、他の大學なるケンブリヂに行きしが、そこにも彼を助くべき學者とては無かりき、僧正今は絶望して、あはれ神にも見はなされしかと悲しさやるせなく、最早一週間もすきぬれば我此世にあらん程も短かければ、友人武士にも暇乞せばやと、家路にこそはつ

かれけり、

小道とぼ〳〵たとり行くときいつも彼れが　めをかけ居たる牧者に遇ひぬ、彼は遙かなたより聲をかけ、

「檀那さま、やうこそは皈りたれ、國王に遇はれて如何なる事には相成しぞ」

「悲しい事になりしよな」

といらへて事の始末を物語れば、牧者はゝ笑みて

「氣をお引立てなされ、檀那樣、愚者も賢者を教ゆる事ありとかや、大丈夫、僕御引受申さん」

「助けてくれると、如何して」

「御心配は御無用、あなたも御承知の如く拙者はあなたに能う似て居ると、人のうわさ、また拙者も見誤れしためしあれば、あなたの衣服、馬、供を申受け、いそぎ都にのぼり、ジョン王に見に、兎も角もせん、事成らざるに於ては、身代りと相成て果つるまでに候」

「忠義なるかなわが牧者よ、我汝の忠義にめでゝこゝは汝にまかすべし、なれども、都合惡しく相成たるときは我に知らせよ、汝死するに及ばず、我行きて死すべきぞ

やがて仕度に取りかゝり、破れたる牧者の衣服の上に僧正の服をつけ、帽を頂き、黃金の杖を取れば、さながらの僧正にて、誰とて牧者と知るべくもあらざりき、急ぎ馬に乘り供を引具し、都の方へと走られたり、

國王とても代人とは知らねば、迎入れて

「よくぞ來りし、けなげなり僧正、されど若し答へられねば汝の首はなきぞ」とおどしたり、

「陛下愚僧は答ふる覺悟にて來りぬ」と牧者言上

す

「さもこそ〳〵、まづ第一の問に答へよ　朕は何時までか活るか」と嘲笑ひて申さる、

「されば、陛下はおかくれに相成るまでは大丈夫それよりは一日たりとも御ながらへ申すまじ、して陛下は最后の息を引取候節御かくれ申すべし、それよりは一秒時たりとも」

王笑はせたまひ

「面白き奴かな、よし朕汝の言を當れりとし第一を許さん、して第二の問は如何に、朕此世界を一週するに幾日か要ずべき」

「陛下は太陽と共に出させたまひ、太陽と共に走り、翌朝まで續けたまはゞ、二十四時間にて世界を一週したまふべし」

王は再び笑はせたまひ、

「そう、されど朕はさほど早く走り得べしとも思はず、汝は可笑しき者たるのみならず賢き奴なり第二はよし、扨て第三に朕は何をか思ふぞ」

「いと易き問にこそ、陛下は今某をカンタベリーの僧正と思ひ居らるゝならめ、されど實は某、彼の僧正に仕ふる牧者にて僧正の許しを乞はんためかくはまかり出たるものに候」

とて、彼の僧服をぬげば、即ちもとの牧者なりけり。

王から〳〵とうち笑はせたまひ

「扨て〳〵面白き奴かな、朕は今より汝をカンタベリーの僧正となしつかはさん、汝の主人老僧正の代りに」

「陛下そはしかるべからず、某は讀み書く事も知らねば」

「よし然らば他のものを取らせんず、はて如何にすべき、よし〳〵汝の世にあらん間は一週間に銀四枚づゝを贈らん、飯り老僧正に告けよ、ジョン王の許を得たりと」

說林

歐米にて觀察したる幼稚園

小泉又一

幼稚園に關しては、我國では、別に經驗なく、唯人から、常識的に承はり、又自分も、常識に訴へて批評した事もありますが別にフレーベル氏の主義をしらべた事はありませんから、幼稚園の事について、かれこれと、批評する事は出來ません、故に、本日御專門の方々にむかつて、私話をするのは、おこがましいことと思ひますが、唯歐

米にて、見聞した事を申し上げて、御參考に供ふるつもりであります。

御承知の通り、獨逸國は、フレーベル氏の、生れた所であり、又始めて幼稚園を開かれたる所も此國の中にあります。即ブランケンブルゾは、其の地でありまして、私は此地を通つて、フレーベル氏の紀念像を見まして、そゞろに昔を追想致しました。

獨逸は、斯樣なる所にも關はらず、幼稚園の數は少なうございます、以前氏の說の誤解から、禁令を受けた事がありましたので、其の影響を蒙り挫折した爲に、盛んにならないのだと思ひます。

此國の幼稚園には私立が多い。そしてフレーベル氏の說を皷吹するのは、フレーベル會であります。此會では幼稚園の研究、幼稚園設立、及ひ子守の教育をして居ます、又一つの雜誌をも發行して居ます。

今主として、伯林について申しあげますが、こゝは、フレーベル會の中心になつて居て、同會長は、バッペンハイムと云ふ人で、一昨年でしたか八十位の高齡でなくなりましたが、曾て此家の茶の會によばれて、種々の話を、聞いた事もあります、其の夫人はもとより、令息二人令孃二人も教育家で一家擧つて教育家です。其中氏の長男は、ギムナジウム（日本の尋常中學校と、高等學校とを合した位の學校）の教授で、主として、博物の教授をせられ、教育趣味のある人で、著述等もあります、次男は、今年工科大學を卒業せられました、又總領の令孃は幼稚園の主任保姆をつとめ、次のは、幼稚園の次席保姆をつとめて居ます、其

の人々の話を聞くと、凡ての話が丸で教育的で至極愉快です。バッペンハイムのなくなられた後、私は、伯林を去りましたから、後の消息を聞きませんが、定めし今日では、會長としてまた適當の人が、出來た事と思ひます。

伯林の、フレベール會では、保姆の養成、子守の養成、及び補習科の名のもとに、幼兒の取扱方を教へます、又三つの幼稚園を起して、庶民幼稚園、中等幼稚園、貧民幼稚園と申します、どれも一度、參觀いたしましたが、中等幼稚園では、夏冬の差は、ありますが、午前中、三時間位保育します、其の保姆は、バッペンハイム孃と、助手二人とでありました。建物は幼稚園として、別に建てたのでなく、伯林市の體育會の一部と、其の隣の一部とを借りて居ますから、廊下づたいに、行く事はできません、門を出て往來して居ます、幼兒は、凡そ八十人位收容するとの事でしたが、一方は四十人位で、子供も大きい方で、バッペンハイム孃が世話して居ます、同孃は、年齡二十四五位です、他の一組は、三十人位ありまして、之には一人の助手が付て居ます、此助手は、保姆練習科生が、或時期になると、手傳に來るとの事でしたが、私の見た時は、練習生ではありませんでした。

幼兒の年齡は、三才から六才までを、通例としますが、時には、二才半位のもあり、又もつと小さい者でも、發達のはやい者は許すといふ事です組合せは、長幼を、一つの組に、集めて居まして其れを、甲乙丙丁との四つに分け、其の四組を、一人で引受けて居ました、私の見た時には、粘土

細工、紙たゝみ、畫さ方をさせて居ました、保姆は、熟練した人ですが、四組を、一時に扱ふのですから、餘程困難です。其の方法は、私の見た時は、四組の子どもに同一の課題を與へて居ました先づ、綠の軸の、白い花で、談話を試み、綠と白との、觀念を與へ、一方には其の花と同じ者を、土でつくらせ、一方には紙でたゝませ、一方には畫などをさせて居ました、頗ぶる巧なやり方だと思ひました。其の後は遊嬉でした、其の遊びの中には、或は靴屋のまねや、蹄鐵工等のまねをして居るのを、見ました、それから唱歌にうつり、最初は讃美歌をうたはせ、祈禱のことば等をいはせます、こういうやうにして、十二時頃になりて、解散しました。此時、着物を、さかへさせてやりますが、迎の者に渡してやる樣子等は、我國の幼稚園とかはりはありません。

庶民幼稚園の方は、矢張三才から六才迄で、又二年半位のも、入園を許す事は、前のと同じですか、唯二組又は三組に、分れてさせます、又別に幼稚園に慣れる爲の組か、一組あります。時間割は、二週間毎に變へて居ます。

茲に、一つ特別の事は、通例夏ならば、朝八時から始めて晝まで〻終へますけれども、又午後一時半から四時までもいたします、晝飯は、近所の者は歸らせますが、遠方の者は幼稚園で與へて居ます、但し辨當代は極安くして與へまして、大抵二錢かゝる者なれば、一錢位にしてつくつてやります。

もう一つは、家の望みによつて、四時から七時まで、預つて居るのがあります、七時は勞働者の

歸る時ですから、そうきめてあるのです。特に御記憶を願ふ事は、一つの組の中が、又分けてある事です。

伯林市では、フレーベル會の外に、ペスタロッチー及びフレーベル會と申しますのがありまして これは先帝の皇后の保護のもとに、出來て居ます 尤もフレーベル會も、政府から、補助金を受けて居ます。其ペスタロッチー及フレーベル會でなす仕事は、幼稚園の仕事と、小學校の仕事と、保姆の養成、子守の養成、及び家政學の教授とに分れます、此會は、未だフレーベル會の樣に全國に渡りません、又其の樣に、盛んに行きません、しかし、立派な建物をもつて居まして至極ゆたかです 此會は何故、ペスタロッチー及びフレーベル會といふかと申しますと、元來幼稚園と小學校の事をやつて居るからです。只今の處では、小學校の方は小學校でやり、幼稚園の方は幼稚園でやるといふ樣に小學校と幼稚園との研究は、別々になつて居ますから、即此連絡をはかる爲の會で、フレーベルを以て、幼稚園を代表し、又ペスタロッチーは近世教育改良家の一人ですから、ペスタロッチーを以て、小學校を代表して居るのです。

此會に屬する幼稚科は、二年半位から、五年迄とし、これを幼稚園と稱へ、二百人を收容します 二年半以下のも入れて居りますが、之は、別にして、幼稚園期は、二年半とします。

組を分けて、十人乃至十四人を一組とし、之を一人の保姆の擔當とし、練習生一人が引受けて居ます、もつとも、上には監督者があるので、其の分け方は、一組の中に、三才から五才迄を一つに

し、凡べて家族的になし、幼兒は兄弟の樣にして保姆は母の如くになり、子供には夫れ〳〵室の掃除や室の裝飾などをさせ又鳥や植木の世話をもさせます、茶を飲む樣な事もあります、凡て、姉は姉、妹は妹の樣に、少しも家庭と違はぬ樣にして兄弟的の關係から、種々なる智識を與へて居ます

そして、全幼兒を集めるには、一の遊嬉室においていたします。恩物を扱ふ上には、大差はありませんが、寧ろ室の整頓、鳥や植木の世話をさせて其の間に、保姆がついて、種々なる開發を致します。

それに、キンダーハイム（子供の家）といふのがあつて、こゝには、二才半、及び其の以下の子供もあつて、貧民の小供を預かります、そして、衣服を備へて置いて、きかへさせたり洗濯をしてやりますが、其れは家政科生徒の練習の爲にさせますから、極都合が宜しい。又

生れたての子も來ますが、一日でも、一週間でも一ケ月でも引受けます、一週間や、一ケ月の預料は、一日より割合に安くなります、引受けると寢車にのせます、之は室内にいくつもありまして一人で十人位づゝ引受けます、之は、子守教育を受けて居る者が引受けて居て、時々牛乳を飲せます。其一日の預り料は十錢（吾國の二錢）です、勞働者の收入は、月に九十マークを取りますから自分の收入の十五分の一を出すのに當りまして、左程困難ではありません、一週間になると、一マーク位になる、そうすると、朝から晩まで引受け立派の服を着せて世話をします、二三度行つて見ましたが、何れも、奇麗な室に、可愛らしい兒が

居て其等を見ると、世中の不平も何も、忘れる計でした。其の中には、大きい子も、小さい子も居て、二年半位になれば、幼稚科に入れるのですが突然三年位になつて、幼稚科に頼まれる事があります、之は、一二ヶ月間別の組に入れておいて、才智や性質を知つた上で、相當の組へ編入します夫れから五才以上の者は特別に研究して居ます即過渡の級で五年半から滿六才迄を集めて一つの組をつくります、この中間級は、十以下の數の數へ方、ABC位の書き方や、わづかな綴り方ぐらゐを教へ、學校生活と、幼稚園生活の中間の取扱をして居ます、一體、獨逸では、國民教育は、私立では許さないのですけれども、特に許可を受けて八才迄茲に置いて、幼稚園と小學校との調和をはかりております、之が、此會の仕事の一斑です。

其他獨逸では、所々に、公園がありまして、保姆が子供をつれて、公園に行きますと、子供の遊場がこしらへてあつて、其の公園を利用して、遊ばせる樣に出來て居ます。

これから、獨逸の保姆の事にうつりますが、保姆の卒業後は、家庭に雇はれます、大きい家では銘々に雇ひますが數家で一人の保姆を雇うのもあります故、方々に四五人づゝの幼稚園が、成立つて居ます。

保姆と、小學教師との待遇を比較しますと、勿論小學校教師の方が、宜しい、保姆は通例家庭に頼まれて居るものは、その家に寄食して居て少し宜しいのが、年に五六百マークの、收入になりますからこの樣なのは反つて小學校教師よりも宜しいのがあります。

次に子守の始めは、年に二百四十マークか、三百マークで、下女は、月に十五六マークで、夫に料理の出來る人でしたら、三十マーク位迄も取ります。

獨逸は、一般に女子教育は、進歩して居ません女學校には、男の先生が居ますか、男の學校には女先生は居ません、しかし、近來は大分進みつゝありまして、此等は丁度我國と同じです、高等女學校は私立が多く、又補習教育として、家政學の樣なものは、頻りに發達しつゝあります。

夫から保姆練習所に入る者は、單に保姆たる職業を得やうとするばかりではなくして、結婚の爲に保育の方法を習ひに入るのがあります。一體、子守や、乳母等のわるい爲に子供を、しくじる事が間々あります、斯樣な事は、吾國でも、大に、注意したい事で、皆さんと一所に、皷吹したいと思ひます。

次に佛國に行きますと、佛蘭西は國民幼稚園が盛んでして、一般に小學校に入る前に、幼稚園に入るのが多い。

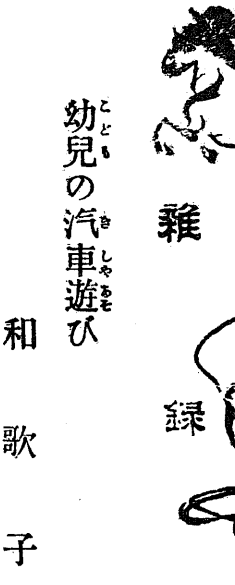
又英國は、既に名から異つて居まして、インフアントスクール（幼稚校）といつて、之は、公に建てゝあります。

小學校の類は、男子部、女部部、幼稚科としてあつて、幼稚科は、三才から七才までゞすが、或學校では、八才迄置きます、之は年齢により、組を異にして居ます。夫から七才から、小學期となつて居まして、幼稚科では二才半位のを、引受けて居る所もあります、組は年齢で區別して居ますが、發達の遲い者は、下の組に入れます、こゝで

は、算術、書方、リーダーの二位を敎へ、其の間に、恩物を扱はして、手先の練習をさせますから寧ろ、學校的です、單に、インフアントスクールと計もありますが、多くの小學校には、皆附設せられて居ます。英國には、私立學校が多く、生徒の數も多くございまして、どれにも、幼稚科が、附屬して居ます。

米國に行きますと、敎育は、洲々獨立制度で、自治になつて居りますけれども、其の中で、最も古くつてよいのは、マッサチユーセッツでございませう。ニューヨークになると、滿六才から小學校へ出す事が通例ですが、ボストン、ニューヨークでは、義務的にやると云ふのは、滿八才から、十四才迄です、そういたしますと、滿三才から、滿六才迄の時期を、幼稚園時期と申します。幼稚園としてのやり方は、殊に、遊嬉を多くします、朝三時間しまして、十一時頃に、茶を與へて、食事のことに慣れさせます。

（完）



雜録

幼兒の汽車遊び

和歌子

廣々とした庭園や野原に遊んで駈け廻つて居つてさへも其活氣が溢るゝばかりの幼兒達、今日は昨日より降りつゞいてまだやまぬ雨の爲に、此處幼稚園（在東京市）の一室に籠城しなければならぬ事になりました。從て室の隅から隅まで幼兒の元氣でみち〳〵て居るやうな心持がいたします。初のうちには窓から首を突き出して、「雨コン〳〵止ンデクレ」と三四兒が聲を揃へて唱へて居りましたが、やがて三十餘の幼兒はそれ〳〵いろ〳〵の遊をはじめました。わたくしではオカッパサンの中央をチョイと結へて鼠の尾のやうなオサゲを戴き白金巾の前垂をかけた之でも組中では年長な株の一女兒が主婦となり、四五の男女兒が子供になりて飯事が盛に行はれて居る。こちらの隅では只一兒一生懸命に積木をして居るものがある。又繪本を前に二三兒が何か話し合つて笑つて居るのもある。五六兒を集めて自分は宛然先生を氣取つて話をしたり唱歌をさせたりして居る兒もある。竹切を劍にした小兵士を操縦して居る小士官もあるそうこうして居るうちに最も複雜に大仕掛にはじめられ永い時間つゞいたのは汽車遊びでございました。

まづ初に年長株の二男兒が何か相談らしい事をして居りましたが、やがて其邊にあつた十餘脚の腰掛を持て來ては向ひ合せ〳〵にくつゝけて排べます。あんなに長くつゞけて何をするのかと思て見て居りますと、最後に一番端の一脚だけは通常に置かずに立てゝ置きました。ハハー汽車の烟突かしらんと思て居りますと、果して其次の處には積木のはいつて箱を置きました。之は石炭でこゝは機關車なので。

さて列車ができ上ると技師は化して乘客募集係となり、室の各方でいろ〳〵の事をして居る幼兒達に、「汽車ニオノリナサイ」と勸めてまはりやへす。「ハイ」と來るのもあり、「アタシ今オバサンゴツコシテマスカラ」とことわるのもあるのを、賴み廻つてやつと十餘人の乘客ができて乘り込みました

すると今度は切手賣兼改札係が乘客の中からも二三人現はれて、長方形の木片を「チョキッ」と口で言ひながら一枚づゝ配つて廻る。之がすむと一人が「ポー」と言ふ。二三人が「ガタン〳〵」と言ひながら兩手を大きく前後にまはす。之は車輪のつもりなので。此際には改札係が何時の間にか驛長にも車掌にも機關手にもなりすまして居るので是れ即ち發車である。乘客の中では私が先生兼阿母さんに推され「コヽは一等イヽトコデス」といふ處に乘せて貰つて居る。「ガタン〳〵」をまじめに一生懸命につゞけて居るのはとりもなほさず進行中なので、私が「此滊車はドコカラ來タノデスカ」と問ふと、「新橋デス」と答へる。此語に連想して一兒は忽ち一同に向つて「滊笛一聲ヲオウタヒナサイ」とすゝめる。皆歌ひ出す。之に誘は

れて今まで他の遊をして居つた幼兒も皆追々集つて滊車に乘る。とう〳〵室中の幼兒が皆滊車中の人になる。すこし立つと「サーコヽハ上野デス」とふれてまはる「御辨當オベントーー」と木を箱にいれて賣るもの「オモチャヤオモチャーー」と其邊にある玩具を賣るもの、「本ヤ本ヤーー」と繪本を賣るものなど樣々である。次に又「ガタンガタン」をはじめ、すこしして「大久保、大久保」と呼ぶ。「皆下リテ躑躅ヲ御覽ナサイ」と言てまはる。私はじめ一同下車する。機關手車掌一同滊車はうちすてゝおいて案内の勢を執り、「ホラコンナニキレイデス」と、をりしも机上の花瓶に生けられてある躑躅の花を指す。「キレイデスコト」などと言つて居ると、「今度は名古屋ニ行キマスカラ早クオノリナサイ」と親切にも知らせて呉れる。即ち乘る。「ガタン〳〵」がはじまる。「エーー名古屋ニ行ク時ニハ富士ノ御山ガ見エルンデス」とふれてまはる兒がある。「ドレドコニデスカ」と問ふと「ホラ御覽ナサイ」と大急に駈け出して往つて黑板に白墨で富士山を畫く。車掌先生二三人また駈け出して、面白がつて畫く。忽ち、富士山が三も四も見える事になる。立ち歸つて又「ガタン〳〵」をはじめ「日光、日光」と呼び、「モー下リテ下サイ」と一同に言ひ皆下りる。

次で客車も機關車も烟突も皆元の腰掛にかへり此遊は終りました。

其翌日も亦雨天で、やはり室内で右のやうな滊車遊がはじまり、二度目の事として乘客も勝手が分つたと見えて、車掌其他の人の命令規律によく從て居りました。そうして此日には重に大森、横須

賀を呼び、前にあつた發車、進行、辨當賣などの事柄の外に新しく、「モー夜ニナリマシタ」「サーモーオヲナサイ」「サーモーオキナサイ」など、乘客にふれてまはる事が加へられ、前に木片なりし切符は紙片に改良せられ、私の居る處には「先生ノトコハキレイニシテ上ゲマセウ」とて、車室に（實は腰掛のよりかゝりに）繪をぶら下げました。

又二三日の後雨天の日に、第三回のが企てられましたが、其時には以上の事柄の外に「ビシャン」と言ひながら客車の戸を開閉する事、「暗イカラアカリヲツケマス」ととわりながら客車の方々に來て上に向いては、「パチッ」と燐寸を擦り燈をともす事が加はりました。

右はまるで辻褄の合はぬ大人の夢の話の樣ではございますが、其背理的で大人からは可笑しい處のまじつて居りますのが、それが即ち幼兒の幼兒たる處で、遊嬉は實に幼兒の生命である。と申しますが、此滊車遊をひとついたしましても、幼兒は幼兒だけの規律を守つてする事でございますから、規律に服從するといふ習慣も養はれますし、多勢でする事でございますから、相互の協同一致といふ分子も無論必要でございますし、一緒にかもしろく遊べば遊ぶほど社交的感情も他愛の感情も溫まりますし、其邊にある物をいろ〳〵に利用してするのでございますから、思考工夫の力も養はれます。かく數へ立てますと此滊車の遊びから幼兒達が受けました利益はなか〳〵少くはございません。又違つた側から考へますと、「幼兒はこういふ事に興味を有ちます。こういふ事を觀察記憶して居ります。こういふ風に思想を發表します。」

といふやうな事を、幼兒自ら演じて私の目前に提出して居る事にもなりますから、私が此遊を見て感じた興味も一方でなく、又參考の材料にもなつた事でございます。

序に書き添へますが、それは、此遊は私が別に指圖めいた事を少しもいたしませんで、幼兒になりて遊んだのでございますから、從て此遊びは全く幼兒の力で企てられ考へられ實行せられましたので、兒は自由意志を實行する事のできる爲に非常の愉快を感じ、一回々々と其しかたや事柄が進み、且つ注意の繼續の短い幼兒の集合であるにも拘らず、第一回には一時五十五分間、第二回には一時十五分間、第三回には一時五十分間といふ風に幼兒としては永く注意がつゞけられ興味を有つて居つた事でございます。

江馬細香女史の詩（前號續）

小林雨峰

詩は心畫なり、前號所載の詩を讀むに、自から女史の心中には一種云ふべからざる煩悶の情あるに似たるを覺う、彼の詩は曾つて大垣藩士某女史細香の許にゆき其の門人たらむとを請ひしに、細香は獨身生活に終りし人なるを以て、自分の如き獨身生活は他の倣ふべきにあらずとて、懇ろに婦道を說きて歸へしやり、其際、彼の詩を賦せしものと云ふ、これ詩中に「唯恐人間疎嬾婦、强將風月做吾儕」と述懷せられたるもの、如し、然れども女史は頗ぶる孝親の人たりしが如し。

一夢匆々半百人。　出懷縷々暗愴神。
月虧月滿望兼朔。　花落花開秋又春。
曾寫畫疑手猶別。　已看書覺眼重新。

此身所願唯無恙。　猶有高堂老病親。』
悠々素願事多違。　一夢人生何是非。
塵想羈因讀書淺。　交遊濶爲出門稀。
抱愁枕上殘燈暗。　待病窓前缺月微。
誰識閑鷗江畔睡。　風波猶欲觸忘機。

高堂老病の親を思ふところ、抱愁、侍病、自から女史の平生を見るべし、句また悠揚として誦するに足る。

思ふに余は曩きに女史の終生獨身に終りし原因を、女史は山陽の許に嫁するを肯んぜりしに由ると誌せしが、頃日、大垣江馬家の子孫某の云ふところに依るに、そは全く婚嫁を排したるにあらずして父母の命に隨つて孝心深き女史は遂に山陽に嫁せざりしものなるが如し。

某曰く、蘭齋翁の長男を門太郎と稱す、不幸にして夭死したり、故に當然細香女史をして家督相續せしむるをとなりしに、翁は自から謂へらく、和多保（女史の名）は普通女子と總て其の氣風を異にせるものあり、故に一生獨身にて暮さすべし、とて女史を呼んで此旨を言ひ渡せしに、女史即座に肯諾したりしも、一生獨身生活の如何にも不都合なりしを思へりしが如しと、左の詩よく這般の消息を窺ふに足る。

次韻平戸藩鎧軒先生見寄作

一誤無家奉舅姑。徒耽文墨混江湖。却慚千里來章上。見說文塲女丈夫。

題自畫

孤房弄筆歲月移。一誤生涯何可追。聊喜清貞與渠似。幽蘭瘦竹寫寒姿。

哀然たる情思、遂に女史をして一箇有爲の女詩

人たらしむ。（東洋風の倫理は兎角の議論あれども、）獨身の女史、其の境遇や憐むべきもの多しと雖も、詩才横逸、當時の才媛中、拔群の聲價を占めたるを、到底、紅蘭女史等の以上にあらしめたるもの、豈に偶然ならんや。

女史の境遇よりすれば、女史の生涯は不平、憂愁また胸中に往來し、家庭の趣味等の如き、閑却せるものありしは氣の毒なりしなり、只た夫れ詩篇の清新、明麗、巧緻のものを見出す、流石に凡手にあらざるなり、

左に出す如きものは女史にふさはしき作と云ふべし。

清流典々蘸春霞。撑出輕舟眼界賒。沙岸盡頭村忽現。遠林一樹認高花。（自岐阜舟行至墨股）

梅月嬋娟奈夜何。微吟移步踏横斜。滿身踈影清如水。但認幽香不見花。（梅邊步月）

閣晴雲意久商量。香霧沈々鎖海棠。自是花邊蝶衣重。高飛不復遇隣墻。（春陰）

雙浮雙浴綠波微。不解人間有別離。戲取蓮心擲池上。分飛要汝暫相思。（松蓮子打鴛鴦）

後詩の如き、造語婉約、情景宛然、濃かなる情、切なる思を呈露し盡して餘すなしと稱すべし、本色の述懷、哀思坐ろに動けるもの、字句の間に現はれつゝあるにあらずや、予はこの女史がかの蓮子を拈して、竊かに、鴛鴦の悠々として樂しげなる樣に接して、健羨の情禁ぜずして、人間の別離かの鴛鴦は解せざるかと、怨恨不平の情を洩らしたる、予はこゝに至りて女史の心中を察して悲哀に堪へざるものあり、

某氏の說によるに、文化十年の頃、山陽尾濃に

遊び、蘭齋を藤江の邸に訪ひしに、翁は女史を山陽の門に入れしめ、山陽歸西の後、女史は文書の往復によりて山陽の教を乞ふ、山陽其の才慧凡ならざるを愛し、梁川星巖を介して、娶らんとせしに、翁は、女史の性好は必ず快諾せざるべきものならんと推斷して、直ちに之を斷りしに、女史は之をきゝて、殘念なりとし、以來心中の悲を增せしを此れより甚だしかりしと云ふ、かの鴛鴦の詩を讀み此の事を考ふれば、女史何ぞ泣かざるを得んや、失意の女史、不平の才媛、之を詩篇に洩らす、情あに禁せざるなきを得んや、詩として遠林春陰の句は之を鄭毅夫の詩と好一對なりと賞せり、其の雨竹、芙蓉を寫すに至つては、咏物の詩品として三唱すべきなり。

滿江風雨望依稀。虞帝南巡去不歸。千歲難乾相思淚。水頭秋冷泣湘妃。（雨竹）

閑紅寂寞照秋池。豈競春風桃李時。昨雨縱然狼藉盡。不將輕薄品寒姿。（雨後慰池上芙蓉）

後詩の如き詩品卓然、而かも其の間楚々として憐むべきを慰むるところ、女史の志、傑出せるところを想見するに足る。甚だ敬すべし。（未完）

幼稚園の遊嬉

十、二列行進

衆兒二行に整列し、樂器の柏子によりて步調を調へ、種々の方向に進行するものなり。

十一、池の鯉

池の鯉の唱歌に伴はしむる遊戯なり。衆兒圓を造りて池となり、五六人の幼兒中に入りて鯉となる始めに皆共に唱歌第一回を歌ひ、次に池となるも

の拍手して第二回の歌を唱ひ、鯉となれるもの兩手を振りつゝ鰭を振るに眞似て池中に浮遊す、第三回の歌「投げてやる麩を食へ」に至り衆兒は左手に持てる麩を右手に採りて投げやる狀をなし、鯉は兩手の手頸を合せて口を造り、之を食する形をなす、第四回の歌に至り池は右又は左に廻轉し唱歌の終はると共に止む、鯉は同時に隨意の所に至り他兒と交替す

十二、お池の蛙

「お池の蛙」の唱歌に伴ふ遊戯なり、形は全く池の鯉と同じくし、中に入りたる幼兒の蛙となる、池となれる幼兒は右又は左に回轉しつゝ「お池の蛙は」と唱ひ出せば池中の蛙は「くわつ〳〵〳〵」と唱ひつゝ跳躍す、「次に「何といふて鳴く」と唱ひ出せば又「くわ〳〵〳〵」と唱ひつゝ跳躍し、順次此の如くにして終結する時は蛙は隨意の所に止まりて他兒と交替す。

十三、雷

衆兒圓形又は直線に并ひ、最初一兒毬を持て樂器の音(雷鳴とす)にて順次其毬を次に送り、音の續く間回送して已めず、音の已みたる時毬を手にしたる幼兒は即ち雷に擊たれたるものとす。

續きて他の遊嬉に移る時は雷に擊たれたる幼兒を出じて遊嬉の或役を務めしむる等のことをなすも宜し。

十四、輪くゞり

甲乙二圓を造り甲は一點を斷ちて進行を始め、隨意に乙の間(大低二人目位)を潛り拔け、終はりたる時は又元形に復す、乙圓は直ちに又進行を始めて前の如くし、斯くして甲乙相互に遊嬉を繰り

反す。

十五、猫と鼠

衆兒圓形を形ち造り、二人の幼兒出でて甲は猫となり、乙は鼠となる合圖と共に鼠は圓の内外を逃げ回れば猫は隨つて之を追ふ、周圍の幼兒は兩手を取りて鼠の出入に際しては入口を大にして之を便にし、猫に對しては之を小さくして不便ならしむる等のことをなす。

十六、輪拾ひ

環を幼兒數より一個或は二三個少くして圓形に排置し、幼兒は其外周に沿ひ音樂に調節して進行を始め、進行中突然音樂の中止したる時一齊に環を拾ふ、其拾ふこと能はざりし幼兒は此際遊嬉の列より脱せじむ、此の如くにして毎回其數を減じ、終に二人の幼兒のみにして一を爭ふに至り、斯くて最後に殘りたるものを以て勝者とす。

十七、盲の遊

衆兒圓を作り、一人若くは二三人の幼兒、中に入りて目を覆ひて盲となる、圓は唱歌を唱ひながら右或は左に回轉し、終ると共に止れば、盲は或る幼兒の聲を聞きつけ歌の終はると同時に其兒を捕へて名を當つることを試み、當てられたる幼兒は代りて盲となり、當らざる時は幾回にても前の如くにす。

讀書餘錄

人情の勝利者

擊水

シルレルの「最新話說中に於ける寡量なる一行爲」といふ一篇の小品文は、義理と人情との爭の

結果を極めて趣味ある筆で、記述したるものである。其梗概を記して見よう。

一部の史藉、一曲の悲劇の中には、時として吾人に示すに人類自然の性情の、最も人目を眩惑せしむる一片を以てするものがある。然も茲に、記載せんとする二個の獨乙人の近來に於ける奇聞の如き、亦頗る珍とすべきである。

烏爾莫男爵家の二人の兄弟は、計らずも同じ都會に住める烏爾都爾家の妙齡の一令嬢に人知れぬ思を懸けた。嬢の婉麗なる姿、嬢の典雅なる振舞嬢の優美なる感情は、相見る毎に男爵兄弟の深き思の種となつた、始めの間は、互の秘密を知らなかつたのであるが、慕る思は隱すに由なく、遂には、二人の間に發見せらるゝ事となつた。若し始から、戀の敵として兄弟同志が立ち向ふ事の如何計り危險であるかを知つたならば、二人ともかくまで闇路に深く立ち入らなかつたであろう。

今や、嬢に對する二人の愛情は既に其極に達して、互に犧牲たることを肯んじ得ぬ程の激情に變じた。此不幸なる二人の情人の間に立ち、悲しむべき位置に陷つた嬢は、無下に一方を斥けて、一方に身を委す事の如何にも心苦しい所から、嚴として局外中立を守つて、いつまでも二人の愛情の爭鬪の結果に一任することに決したのである。

果しもないに耐え兼て、兄男爵は、遂は人情の勝利者として弟に向つた宣戰の布告を發した。

『弟、お前が嬢を愛してる心の、已に讓らないことは、よく分つて居る。此場合、已は決して兄の權利がどうのこうのといふ樣なことは言はない。で、お前は此處に殘つて居るがよい。己はこれか

ら暫く旅行に出かけて、兎に角、孃のことを忘れる事に骨折つて見る、……若し夫が出來たら、弟……忘れることが出來たら、もう孃はお前のものだ、己は天に向つて汝前たちの祝福を祈らう、が然し、不幸にして、忘れることが出來なかつた曉には、其時は、お前も亦己と同じ樣に出かけて行かなければならないよ』

かう言ひ殘して兄男爵は、すぐに獨乙を出て、さしあたり和蘭國へと急いだ。然しながら、到る處に孃の姿は彼を追つかけて離れないのである。情人に別れ、故國を離れ、天外萬里の孤客となりて、彼は遂に羈旅の空に疾ひに至づた。絶望に絶望を重ねて編巢照段に到着した時、更に彼は恐るべき熱病の襲ふ所となつた、然も、孃の容姿は、夢まばろしの間にも、正氣なき彼の全心を司配するのである。醫師も既に術の施すべき餘地ないことを斷じた。而してたゞ一縷、彼の絶ゑなんとする氣息を繫ぐものは、孃を得るといふ保證にあるのだ。之によつて漸く彼を死の手から奪ふことが出來た。旅の疲と、のみならず九死の病から歸つた彼の相格は、全く半死の骨と皮許りで、ありし元の面影とは、とても似ても似つかない。

『弟、又歸つて來た。己の心盡しは神が知つて居る、己には此上もう言ふことが出來ぬ』

かう言つて、力ない身を孃の體に倚せて、やつと支へた。

弟男爵は猶豫なく心を決した。一週間と經たない中、甲斐〳〵しき旅裝束で出て來て兄に言ふには、

『兄さん、卿は心の苦をお忘れになる爲め、は

る〳〵和蘭までもお出でになつたそうじやありませんか、私は寧のこと、もつと〳〵遠方まで行つて見ようと思います。然し兄弟のよしみとして、たゞ一つの御頼は、此後、私が何處の國からか御音信をするまでの間、どうか令嬢との御結婚丈を御待ち下さい。神の恩で、萬一卿より仕合はせよく行きましたら、其時は、嬢は兄さんのです。私は永遠に御二方の幸福を神かけて念じます。不幸にして、又私も卿と同樣の結果にたち至りましたならば、アヽ其時は、左樣、神樣がよくして下さいましよう。兄さん、御機嫌よく御暮しなさいそして、此封印した小箱は、私が去つて仕舞つた後でお開き下さい。私は之から、波多比亞に行きます」

別離の涙、拂ひも敢えず、待たせ置いた馬車に

飛び乘つて、二人を後にした。兄男爵は殆んど氣を失つた樣に其後を凝視めて居る。次第に遠ざかりて行く馬車の轍の轟々の音は、まことに彼の心の底まで響き渡るのである。現在血を分けた弟、よも生きては歸るまいと思へば、殆んど立つても居ても居られないのである。此際、令嬢は……いや、之は話の終はりに至つてよく分る。

馬車の姿は遂に隱れた。彼の小箱を開いて見ると、何ぞ計らん、其中には、獨乙國内に於ける弟男爵の所有財産悉皆の證文が納めて居た。彼が波多比亞に到着した後、兄男爵に讓り渡すといふ書き付けを添へて、

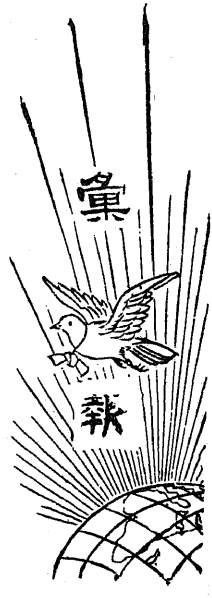
其後弟男爵は、和蘭の商船に便乘して、無事に彼地に到着した、そして數週間經つてから、兄男爵は其書面に接した、書面の意味の大要は、

『全能の神に感謝す。此處に新世界に着してより我は我が心の爽快なること殆んど彼の詢敎者の夫の如きを以て、吾等二人の愛情に付きて考ふるに至りたることを。珍らしき景色、新なる運命は、忽ち我が狹隘なりし從前の思想界を擴張しつ、全能の神は我に與ふるに、友愛の爲めに最大の犧牲を供すべき力を與へたり、孃は……ア、一片の涙の滴下するを如何せん、女々しとな咎め給ひそ……最後の涙なるものを……我は遂に打ち勝ちぬ……孃は兄上のものなり。然れども兄上、我が心より彼女を忘れんとの如何許り容易ならざりしかは、よくも知り給はん、さらば、ゆめ、彼女を得られつることの如何許り困難なりしかを忘れ給ひそ……未來永劫、彼の天使を遇するに、幼き愛情の今兄上に敎ふるが如くせられよ、願くは、兄弟の遺寶として末長く彼女を勞はり給はんことをさらは兄上、さらくいませ、結婚式の日に付きては、もはや書き送り給ふに及ばず、我が痛殤の血液は尙未だ湧きて止まねば、たゞ〳〵兄上の事なきを報ぜられよ、全能の神、又天外に在る我を祝福し給はんことは、我が行爲こそ證人たれ…。

婚儀は芽出たく、兄男爵と孃との間に結ばれた併も、幸福の夢は僅に一年にして破れた。男爵夫人は病みて死なれたのである、死ぬる間際になつて、夫人は日頃最も親賴せる一侍女に告ぐるに、其胸中の最不幸なる秘密を以てした。彼女の愛は實に弟男爵に向つて、より强かつたのである。

この二人の男爵は今尙、現に存命せられて居る兄男爵は獨乙國で立派な財產を所有し、新に妻を

迎へて。弟男爵は波多比亞の地で、最も幸福に最も有力なる人として繁榮を極めて居る、而し、盟つて、妻を娶らぬとの最初の決心を、今以て守つて居るとの事である。



●女子高等師範學校　先月十三日午前八時より同校附屬高等女學校に於ては、第五回演習會を開會せり、始めに唱歌「みがかずば」の合唱あり、演習の事項は　說話、唱歌合唱及獨唱、書畫席書、ピアノ聯彈及獨奏、ワイオリン合奏、對話、英語暗誦、英語演說、朗讀にして、十二時唱歌たのしわれを合唱して散會したりといふ▲暹羅國皇后陛下の派遣にかゝる本邦留學女生ビット（十五年）、ジョーン、ノーワン、リー（各十四年の）四名は、先月十五日文部省令十五號外國人特別入學

規程によりて入學許可相成りたる由

●女子教育講話會　婦女新聞社の催にかゝる同會は去月十四日午後一時より神田一橋通町帝國教育會に於て開かれたり。先づ藤田文藏君は「女子に對する希望の一端」と題して、女子は單に己の爲めのみ事をする事なく世の爲社會の爲といふ事も考ふべく、しかも男女各職分立場を異にすれば婦人は婦人らしく、温順謙遜柔和なるべく、而して確信を以て世に處し妄に他に動かされず、自己の心と力に由て事をなすべしと述べられ、次にオルガンの獨奏あり。次に宮田修君は動物虐待防止會の趣意を述べ今回新に婦人部を設けたる事を告げられ、再びオルガン獨奏あり。夫より安井哲子君（婦人の矛盾的生活）と題して婦人が主婦として、妻として、母として一家に、夫に、子に献身的に愛情を捧ぐるはさもあるべきことなるが若し之れ次外の他人に興味を有たず、他の幸福といふ事を考へざる時は、是れ一方に献身的なると共に一方には利己的にして矛盾せることにあらずや。殊に學生生活をしたる人。又は現にしつゝある人は自己中心生活に流れやすし。是れ勉學時代は自分がよく勉強すればよき時代なれば、其極他人に對して興味親切なきに至り、遂には世事人情にうとくなるに至る。要するに世の幸福、平和の源は人々各己をすてゝ他を思ふにあり。と述べられ、次で巖本善治君は「何をか新しき女學といふ」と題して、舊幕時代の女子教育は自ら身だしなみよき全然犧牲献身的の女子を作りし事を論じ新女學としては此上に社會政治國家等百般の事に智識興味を有し、見界の廣かるべき事、盲兒、生

理、心理をわきまへ、母として教育思想を欠くべからぬ事、女子自ら、及女子を教育する人が女子の美德を尊敬して人は何處までも善良に發達し得る希望と信仰あるべく、女子を輕ずるはあるまじき事なりと述べられ、最後に子に及ぼす母の感化の例證を擧げられ深き感動を聽衆に與へられたり。

●東京府教育會の夏期女子講習會　同會は今般教員たるに必須の學力を補充し、兼ねて一般女子のために新知識を得しめんがために、來月一日より同廿一日まで東京市神田橋外元東京府第一高等女學校内に開設するものにして、學科及講師は左の如しといふ。

教育（教授法）女子高等師範學校教授　下田次郎

國語　東京女學院講師　國分操子

音樂（附教授法）元東京音樂學校教授　小山作之助

應用化學……講師未定

裁縫教授法　東京女子師範學校教員　小谷野千代

因に、講習料は、一科一圓　二科一圓五十錢、三科二圓　四科以上二圓五十錢　但し音樂のみを修むるものは　一圓五十錢なりと。

●動物虐待防止會婦人部　動物虐待防止會に於ては今回新に婦人部を設立し去月二十日九段牛ケ淵体育會に會員中の婦人集合し席上廣井辰太郎宮田修、高島平三郎、本田增次郎諸氏の同會の趣意目的、婦人部設立に付て其他有益なる談話ありさ。

因に言ふ同婦人部は爾後毎月一回集會する筈

●音樂會　先月六日は兼ねて報導したるが如く一番町教會の慈善音樂會あり、同十三日には基督教青年會の主催にかゝる慈善音樂會あり同十四日には明治音樂會あり、尙廿八日には武甲會の慈善音樂會ありたる由、右總べて東京音樂學校に於て開會したり。

●博覽會行學生乘車賃大割引　官設鐵道にては夏季休暇を利用し博覽會を觀覽せんとする各學校生徒の便利を計り、團体乘車の場合には、三等乘車賃金に限り左記の通り低減する由、但し團体乘車は同一學校の生徒にして同校職員の申込、又は證明ある場合に限り、其時限は先月廿五日より七月三十一日迄なりといふ。

人員	百哩未滿	百哩以上	二百哩以上	三百哩以上
十人以上	二割	三割	四割	五割
五十人以上	三割	四割	五割	六割

○全國人口增加の割合　日本全國に於ける人口の統計を聞くに、去る三十二年間の人口の增加は四十五萬四千九百三十二人にして、之を全國中最も人口少なき鳥取縣の人口に比するに、尙三萬三千九百十二人多しと、又出生數は千人に對し三十人五分五厘にして、死亡數は二十人五分三厘に當り即ち人口增加は一ヶ年千人に對し十人二分の增加を見る割合なりといふ。

攝津通信

在魚崎　通信員　平岩學洋

●產婆講習　兵庫縣武庫郡にては、明治卅四年

（二月）仝郡告示第六號產婆養成規則により仝講習生を募集したる由

●看護婦傳習　仝郡告示第七號看護婦規則により、郡費看護婦傳習生を募集したり。

●裁縫學校の新設　今般武庫郡に於ては女子に必須なる裁縫の技能を敎へ、且つ將來良妻賢母たるに必要なる智德の養成及び處世の要道を知らしめん爲め、本年四月より新に公立　裁縫學校を設けしもの、鳴尾、大社、瓦木、良元、甲東、大精道、本床、本山、魚崎、住吉、西灘、六甲、の十三個村の由、女子補習敎育及從來の寺子屋的弊風を矯正する上に就て裨益尠からずと認めたり之等學校の狀態及一般父兄が學校に對する有樣生徒生活の狀況等何れ取り調べの上御報知致す可き考へなり。

●女子の結髮　結髮に就きては大人は兎に角子供に就て一言せんに畿內附近は子供の結髮は一般に遲く、大きくなるまでかみを剃り、所謂、をかむろうとする風あり。此れを相模（余の生地）と比較せんに尋常一年生位の子供の髮の結び工合が恰も當地尋常四年生位の子の髮の結方と同じ位なれば自然子供の樣子等餘程變りをりて子供らしき所あり。

●婦人會　淡路三原郡に於ては婦人會の設けありて、春秋二回總集會を開き、保育談、衛生談、家庭談等夫れ〳〵其の大家を招きて講話を聞く事となりをる由、余當年四月博覽會を掛けて、淡路なる我が恩師を訪ひ逗留中幸に春季總集會を三原郡三原高等小學校內に開かれ淡路高等女學校長、喜田醫師等出席して有益なる談話ありたり

●灘五郷清酒醸造高（明治三十五年度）芳香天下に比なき灘酒の造石高を御紹介せんに、是れは明治三十六年四月調査に係るものなるが、清酒査定石數三十八萬千二百九十四石、課税石數三十七萬三千六百六十八石にして、總藏數三百八十八、總人員百四十人、平均分額一人に就き二千六百八十五石の由、

新刊紹介

●美文模範國語作文　一冊　文學博士　小杉温邨監修

博士のはしがき先づ麗はしく、さし繪色刷の文房具最も美しいが上に、著者の緒言古今文章の模範に付きて書目と著者とを論じられたるなど極めて有益なり、さて、本文は四季、天象、地理、人事雜等の諸部門に別ち、納むる所の文には百數十、悉く古今名家の筆にあらざるなし。其上　各部に　悉く有益なる類語を古今の名著より引用列擧したるなど用極めて周到。眞に作文の楽たるに適せり。近世の學生の文を作るに、多くは　普通の女學雜誌などに出でたる　同壘の懸賞文などを眞似るもの多し、かくては到底古人に及ばん程の文を得んこと難きは明なり。吾等は、切に此の如き良書を机上の友とせんことを勸むるものなり（定價五十錢　發行所、東京神田區鍛治町四、誠之堂）

●七夜ものがたり

●百姓と惡魔

●五斗兵衛

右少年世界文學の十、十一、十二篇として出でたり。表紙の美麗さし繪の鮮明雅致、讀んで　少年諸君に面白いことは、前々篇より既に分つて居るなり（定價一冊十二錢　發行所東京神田區裏神保町九　富山房）

●中學新遊戯　一冊　高山源助著

中學校の遊戯を記載したるもの、未だ一も見ることなきに際して本書は出でたり。記載せる中從前行はれたるものあれども、多くは新らき種類を集められたり。數凡そ五十有餘、遊戯法の研究盛なる今日、歡迎を受くること間違なし（定價二十八錢　發行所　同所）

●下道の枝析　一冊　赤澤晃著

吉備公の墳墓の地を改修せんとの目的にて吉備公保廟會なるものを起し、此目的の爲めに又本書を出版せられだるか如し。吉備公の傳、吉備の景勝等を面白く記載せられたり（定價一冊十五錢　發行所　同所）

●人道教育論　一冊（ラルフ、ワルド、トライン原著　木下祥眞譯）
翻刻自由の銘打つたる所、先づ記者の心のゆかしさを知るべし。最も平易に人間教育の道を記載したり、是非おっ母さん方の一讀再讀を煩はしたきものなり。小さき子供を教へて、動物や下級のものに對して殘酷ならぬやさしき心情を養はんとする人には特に本書を推薦す（發行所　東京神田區南甲賀町八、內外出版協會）

會報

第廿九常會

明治三十六年六月十三日午後一時三十分より番町小學校附屬幼稚園に於て開會、小泉又一君の演說（歐米にて觀察したる幼稚園）幷に會員相互の隨意談話ありて午後五時閉會したり、出席者は客員尾田信忠君會員四十餘名なりき。

入會

神奈川縣橫須賀町汐留三一　福本ゆき
仝　橫須賀小學校　橋本たへ
右紹介松岡幸

深川區佐賀町一ノ四三　右紹介東基吉
麴町區山元町三ノ四　西村もと
四谷北伊賀町廿七　奧野まさ
麴町區三番町二五　鈴木しげ
仝　三番町一二竹內方　井上たま
四谷區簞笥町三九岩田清三郎方　川北千代
埼玉縣北足立郡大宮町一三一　落合くめ
島根縣濱田町新町　右紹介大橋いぬ
遠江國濱松高等女學校　小林きせ
千葉縣千葉町教員養成所　右紹介波多野とく
神戸市立幼稚園　右紹介永地待枝　右田るい
麴町區富士見町二ノ一八　右紹介中村五六　林節
仝　一ノ三三　右紹介大島小春　脇谷しけ
本郷區春木町三丁目森方　右紹介榎本つね　平河長子
四谷區愛住町七六　右紹介雨森釧子　清野くに
右紹介下田鶴　柳原英子　尾立とみ
小貝貞子

府下王子村十五　清水みつ
日本橋區横山町一ノ二　右紹介松田とし　山田梅
麹町區紀尾井町六　右紹介山田糸　御木本みね
信濃國松本飯田町　右紹介齋藤みね　藤森貞子

改姓

改富岡　佐藤むめ
改田中　阿部好

轉居

横濱市伊勢町二ノ五五へ　佐和山たか
鳥取市東町二一〇へ　岡澤やへ
麻布區飯倉三ノ一一へ　利光しづ
麹町區四番町六番地へ　津原ちか
神田區仲猿楽町十七との九へ　佐藤むめ
清國武昌へ　戸野みちえ
麹町區下六番町四八へ　浅田つる
四谷愛住町愛住幼稚園へ　三好芳
麹町區麹町二ノ九　楠田むつ
麹町區隼町三六小林内　柴岡照
牛込區新小川町二ノ一　小岩えい

會費領收

金額	自三十六年五月二十一日 至何年何月何年何月	姓名
一〇〇錢	三六一〇一	寺島とみ
五〇	三六一〇六	安達かつ
一〇〇	三六一五二	渡邊千代
一二〇	三六二一一	飯野ふみ
六〇	三六二七一	松村ひさ
五〇	三六九四八	箱石孝藏
五〇	三六八四一	下田たづ
一二〇	三六一二五	永地待枝
一二〇	三七四四八	右田るい
五〇	三六八一五	矢野ふさよ
五〇	三六五六一	鳥居鉞三郎
一九〇	三五六二六	佐和山たか
六〇	三六六一一	尾立さみ
八〇	三七六一六	清野くに
七〇	三六六二一	柳原英子
五〇	三六六九五	飯山らん
六〇	三六六五一〇	森山房

四〇	三六 六	三六 九	河野きよ
一〇〇	三六 六	三七 三	清水みつ
一〇〇	三六 三	三六 一二	松田とし
七〇	三六 六	三六 一二	平河長
一二〇	三六 一	三六 一二	彼佐谷みち
六〇	三六 六	三六 一一	藤森貞子
二〇	三六 五	三六 六	石原準
二〇	三六 六	三六 七	對島かめ
五〇	三六 一	三六 五	石山ひさ
一〇〇	三六 三	三六 一二	石島廣
一〇〇	三六 六	三七 三	絹川ひろ
六〇	三六 五	三六 一〇	谷くま
五〇	三六 四	三六 八	尾崎萬龜
五〇	三六 四	三六 八	岡澤やへ
五〇	三六 六	三六 一〇	外山茂
三〇	三六 六	三六 八	村川愛
四〇	三六 四	三六 七	柴田かづ
五〇	三六 五	三六 九	福田米
一〇	三六 六		安東てい
一〇	三六 六		木村寅枝

二〇	三六 六	三六 七	和田いよ
二〇	三六 六	三六 七	佐々木茂
五〇	三六 五	三六 九	山田はる
一〇	三六 六		内田たね
一〇	三六 六		岩田ゆき
一〇	三六 六		益田一枝
一〇	三六 六		奈良あい
一〇	三六 六		藤谷いわ
一〇	三六 六		加藤きづ
一〇	三六 六		平川よし
一〇	三六 六		藤岡とき
五〇	三六 六	三六 一〇	井上たま
二〇	三六 六	三六 七	川北ちよ
二〇	三六 六	三六 七	落合くめ
五〇	三六 二	三六 六	山田やゑ
五〇	三六 二	三六 六	柴田ちた
一二〇	三六 四	三七 三	田中ふさ
四〇	三六 六	三六 九	吉田しう
一〇〇	三六 五	三七 二	星野ひさ
八〇	三六 五	三六 一二	勝田すみ

三六八五	小岩えい	四〇	五〇
三六八五	阿部好	四〇	六〇
三六八五	工藤ふし	一〇	一五〇
三六八五	伊藤いつき	三〇	一〇〇
三六八六	御木本みね	六〇	七〇
三六八六	有川ひさ	七〇	四〇
三六八七	八田さた	四〇	一一〇
三六八二	中島行德	五〇	一〇〇
三六八四	貫しけ	三〇	六〇
三六八四	岡田ちよ	八〇	三〇
三六八六	北村いと	六〇	三〇
三六九一	近藤茂	一九〇	七〇
三六一二	楠田むつ	一〇〇	一〇〇
三六一四	淺田つる	三〇	一〇〇
三六七五	多田きう	一五〇	一二〇
三六八五	三好芳	一二〇	五五
三六七〇	石山けい	一五〇	一二〇
三六八七	中原ふく	一二〇	一〇〇
三六七六	平塚さた	一二〇	四〇
三六七一	野秋きよ	一〇〇	四〇

三十三年度分と外に

三六八五	小島はま	五〇	一〇〇
三六八五	松岡幸	六〇	一〇〇
三六八六	坂本あき	一〇〇	一〇〇
三六八六	橋本たへ	一〇〇	一〇〇
三六八三	坂井みとり	七〇	一〇〇
三六八二	高本梅	四〇	一〇〇
三六八五	重田ふぢ	一一〇	一〇〇
三六八四	佐野とく	一〇〇	一〇〇
三六八六	佐藤しけ	六〇	一〇〇
三六九一	小林きよ	三〇	一〇〇
三六四一	高山ふみ	三〇	一〇〇
三六二二	後閑菊野	七〇	一〇〇
三六五一	山口酉三郎	一〇〇	一〇〇
三六六四	谷田部じゅん	一〇〇	一二〇
三六二六	斯波やす	三〇	五五
三六四九	南廖まき	一五〇	一二〇
三六八七	町田則文	一〇〇	一五〇
三六七〇	新井博次	一二〇	一二〇
三六七六	齋藤鹿三郎	一二〇	一〇〇
三六五一	舘つね	一〇〇	四〇

吉武しやう	一五〇	三五七一六
保科修	一一〇	三五六一二
保科修	一二〇	三五六二七
新開三枚	一五〇	三五六四九
伊藤貞勝	一〇〇	三五六九六
田原かね	一五〇	三五六二九
鈴木てる	一五〇	三五六三
今井つな	一二〇	三五六二一
森川清	一一〇	三五六一一
吉市靜	一一〇	三六六四三
古市幸	一二〇	三六六二二
山崎彦八	一二〇	三六六一九
春田たか	五〇	三六六二一
佐久間よね	七〇	三六六四六
金子きた	一〇〇	三五六二一
上遠野あい	一二〇	三五六一〇
小關すて	一二〇	三六六一一
石井國次	一〇〇	三六六九五
武井綱枝		三六六一〇
桑原いはほ		三五七一六

横山榮次	四〇	三五六四
吉村千鶴	六〇	三五六八
伊藤成	六〇	三五六七
今立裕	一五〇	三五六四
小池みつ	一〇〇	三五六二
西島富壽	二〇〇	三五六四
大羽ひさ	一〇〇	三五六二
下村三四吉	一五〇	三五六四
佐方しづ	一二〇	三五六七
立花はる	一一〇	三五六八
澤村きみえ	一二〇	三六六六
東條順	一一〇	三六六一
和知てる	一一〇	三六六七
新免義勇	一六〇	三六六一
富岡龜門	一八〇	三五六一
伊藤弘一	一七〇	三五六二
黑田定治	一六〇	三五六一
市原すみ	一二〇	三五六一

細川十州先生序文
三輪田眞佐子刀自著

分本の子女

第十四版出來

彩色摺表紙大和綴菊版美本
全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所

東京築地二丁目
國光社發兌

新刊

澁谷愛編纂

萬國女子風俗

四六版洋裝　定價廿五錢　郵稅四錢

著者高等女子教育に從事する十餘年今は萬里の波濤を越へて歐米觀光の路に上る亦たゞ斯學に裨益せんが爲なり本書世界各國女子の面相服裝風俗習慣化粧及結髮法等を平易に記述して洩らす所なし此人にして此著あり又何ぞ觀察の奇警にして文字の飛躍せるを疑はんや

株式會社國光社
東京築地二丁目二番地
電話新橋特八八番
振替口座東京一九六二番

女子作法割烹夏期講習會會員募集

◎學科　○作法は本年三月文部省訓令高等女學校修身作法教授要目により第一第二學年及第三第四學年に應用する細目實習と心得とを併せて講習す○割烹は泰西割烹學校教授法によりて講習す

◎擔當講師及諸規則　○本邦料理師範八世石井治兵衛、帝室流、伊勢流、小笠原流、明治式、禮節講師石井泰次郎○開期は明治三十六年八月一日より十二日まで○講習時間は毎日午前四時間（作法）午後四時間（割烹）○會場は神田一ッ橋帝國教育會内○講習料は一科金貳圓二科金參圓五拾錢（但し作法割烹の二科に分ち兼修隨意とす）○講習證作法は大日本禮節學會第二回女子作法講習會證を割烹は大日本割烹學會第一回女子作法講習證を授與す

◎婚禮式講習會　講習希望者の爲特に八月十三日より開會して婚禮一式の作法教授法及技藝品一切を講習す講習料金參圓なり志願者は氏名住所を記し七月廿五日迄に講習科を添へ東京市京橋區鈴木町十一番地大日本禮節學會内女子作法割烹夏期講習會事務所へ申込み講習會員證を受取らるべし

（尚詳細規則書あり入用者は「郵券二錢封入」申込まるべし）

フレーベル會規則

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ヘシ

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スヘシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一　總會　毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參列品幼兒成績物展覽會　會務ノ報告、幹事ノ選擧等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一　常會　毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一　組合會　會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一　雜誌發行　毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

一　前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人　會務ヲ總理ス

主幹　一人　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　十人　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干人　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條　主幹ハ會長ノ特選トス

第十條　幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條　評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコトアルヘシ

第十三條　此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

會　告

東京市内の會員諸君にして會費未納の向へは本會より受取人をさし向け候間領收證引代へに御渡し下されたく候

フレーベル會

謹　告

七、八、兩月中本誌の原稿は左の所へ御送附下されたく候

東京市本郷區龍岡町三十四番地

東　基　吉

尙毎月十五日までに御送附下されたく候

婦人と子とも編輯部

(婦人と子ども第參卷第七號)
(明治三十六年七月五日發行(毎月一回五日發行))

明治三十四年二月六日內務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

◎◎空前の唱歌良教科書!
◎檢定濟生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定濟

唱歌教科書

教師用 全四冊 第一卷定價金三十錢 第二卷定價金三十錢 第三卷定價金三十錢 第四卷定價金三十錢
生徒用 全四冊 第一卷定價金五十錢 第二卷定價金五十錢 第三卷定價金十八錢 第四卷定價金十錢
郵稅一冊に就き金四錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科用書として非常なる大喝采を博し僅々數月間に會して三版發行の盛運に會したる本書は今回其生徒用教師用共に文部省の檢定を經て更らに其眞價を發揮すること從來文部省檢定濟と世に刊行せる唱歌集は皆悉く教師用即ち教師の參考書として許可せられたるものにして生徒用即ち眞の教科用書とし檢定を經たるものは實に本書の如何に優れたるかを知るべし

●洋琴 金參百圓以上 貳千圓迄 各種

●ヴァイオリン 鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種 舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

●樂隊用樂器 大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

●鼓隊用樂器 太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上 ○學校用一組拾參圓

●手風琴 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

●附保險 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョーレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ、オルガン 調律修繕

●郵券貳錢御送附 目錄進呈

(電信略號ヨキ)
電話新橋五百廿九番
東京市京橋區竹川町三十番地
共益商社樂器店